
花咲く頃に

らいん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花咲く頃に

【Nコード】

N3845I

【作者名】

らいん

【あらすじ】

さまざまな思惑で政略結婚により敵国に嫁いだ姫のお話です。国と国に挟まれ運命を狂わされていく姫と冷酷非情と噂されていた皇帝とのすれ違いながらも惹かれていく不器用な二人の物語。

序章（前書き）

歴史背景まる無視です

お楽しみいただけたら幸いです。

序章

1000年以上続く大国、リチュワード

この国の人々は神々を重んじ1000年もの間幾多の戦をくぐり抜けたいわば神国として

他の国々からも常に一線を置いてきた。それゆえリチュワードには神々の神話は数多くあり皇族はその子孫ということになっている。しかしここ近年リチュワードさえも凌ぐ大国が出てきた。

ボルツワーク国 それがかの国の名前である。

突然出てきた大国に成す術もなくリチュワードはボルツワークからの懇願という形の要請を受け入れるほかなかった。

リチュワード国第2皇女をボルツワーク現皇帝の女神とし母として崇めそしてボルツワークとリチュワード両国の和平の証としてお招きしたい。

これがボルツワークから届いた書簡であった。

序章（後書き）

おもしろいものをつくりたいと思っているので
ぜひお付き合いですませ

リチュワード国

緑溢れ、自然豊かな国リチュワード。それゆえ1000年以上も続いてきたこの国の後宮の更に奥、内宮と呼ばれる皇女、皇后、皇太后、皇太子妃、内親王という皇帝の次に身分が近い者しか住めないところに彼女はいた。

そう、あの知らせを受けるまでは……。

「なんだか今日は騒がしいわね、ラン。後で見えてきて頂戴」

そう、侍女に話しかけたところでふと、彼女は手を止めた。

「どうか、されましたか？」

少し俯いてしばらく何か考え込んだ後、ポツリと言葉を紡ぎだした。

「嫌な……嫌な予感がするの。ラン」

普段彼女は弱音など吐くことはない。いや弱音など言えない立場にあるからだ。幼き頃から皇族してのあり方を徹底的に叩き込まれた彼女にはいえるはずがなかった、実際に10年以上前から仕えていたランでさえも弱音はもとより涙さえ一度とさえ見たことがなかった。

「大丈夫ですよ、姫様」

「そうね」

そういつて笑った彼女は今にも泣きそうだった。

突然だった。

その知らせが来たのは・・・

「リチュワード国第2皇女　ファナ・リチュワード・アテナをボルツワーク国皇帝の正妃として立后させる」

彼女はその知らせを後宮に来た大臣に聞いた時も頷いて「分かりました、そのように致しますと、皇帝陛下にお伝え下さい」とだけ告げて自室に戻ると大臣を下がらせた。

強い方なのだと思った、あんなことをいったのは単なる気まぐれだと・・・

でも彼女と彼女の自室に戻った瞬間分かった。

決して強い方なのではないと、いままでずっと我慢していたのだと。

「おめでとうございます。姫様、お相手の皇太子様も諸国に噂高い姫様が正妃となられてさぞ嬉しいことでしょう。それに姫様に見合うお相手で姫様も・・・」

「・・・っ」

「姫様いかなさいました？」

「どうしてっ・・・私なの」

「・・・っ!!」

「私はお父様に捨てられたの？」

ランはしばらくその場から動けなかった。

次の言葉が見つかるのにどれくらいの時間がたったか分からない。それまでずっと横で泣き崩れた自分の主と肩を抱き合って泣いた。

「ひめ・・・さま」

とても長い時間に思えるような時を泣いて過ごした後、ランは遠慮がちに彼女に声をかけた。

「ラン」

透き通る声だった。「はい」と呼ばれた方を見てランは固まってしまった。

先ほどのことが嘘のように彼女はまっすぐ窓のほうを・・・いやそのもつと遠くを見つめていた。

「私はボルツワークに行きます。ついて来てくれますか、ラン」

「はい、お任せさせて頂きます」

「ありがとうございます」

このとき、すべてが始まった。

リチュワード国（後書き）

誤字脱字があればご報告頂ければありがたいです。

短い文ですが、もう少し物語が深くなってきたら長くなるかと・・・
ここまで読んでくださった方に感謝感謝

来訪者

ボルツワークに嫁ぐ

そう決めた日から自分を取り巻く環境が大きく変わったように見えた。

実際変わったのだが……

今ままで皇位継承権から程遠く周りの貴族達から注目さえされなかった突然ファナに多くの者が訪れるようになった。そのほとんどが軍事大国ボルツワークとかかわりを持ちたいと思っている大貴族ばかりでその目からは欲が見えみえだった。

「なぜ人はこんなに欲が高いのでしょうか。ラン、私は彼らが羨ましいわ」

ファナは普段嫌味などほとんど言ったことがなかったのだが少し意地悪く笑ってみせた。

「ごめんなさいね、ラン。別にあなたにいつているわけじゃないの。でもこんな日が毎日続

けば嫌味の一つぐらい言いたくなるものだわ」

そういつて舌を少しだしたファナをランは初めて見た顔だった。

突然、キィと軋む音がして扉のほうを振り返ると一人の男が侍女を連れ入ってきた。

「失礼致します。皇女様にご挨拶したく皇帝陛下に許しを得まして参上しました、宰相の

ギシルと申します。以後お見知りおきを」

静かにしかし存在感あふれる動きで堂々とファナの私室に入ってきて

た自分のことを宰相といった男をファナは静かに睨み付けた。

「失礼ではないでしょうか？」

沈黙が続く中、先にファナが話し始めた。

「何がです？」

「皇帝陛下に許しを得て・・・そこまでは分かります。しかしここは私の私室です。用があるなら、私の来賓室といものがあります。そこでお待ち頂くのが自然ではなくて？」

突然始まった口論にランは驚いて、ポトツと茶葉を落としてしまった。

「これは女性に対するマナーというものでしょう。私がボルツワークに嫁ぐとか、皇女だからとか、それは関係ありません」

ぴしゃりと言い放ったファナに男は口角を上げた。

「何がおかしいのです？」

「いやいや、ご気分を害したとはこれは失礼致しました。しかし、ボルツワークの皇太子

妃となられたと聞いてすぐにもご挨拶に行かねばと思ひまして・

・・・

これはお祝いの品です。お納め下さいと続け急に従順な姿勢を見せて床に伏した宰相を見て、ファナは拳を震えるほど握り締めた。

「これは私を試していらっしゃるのですか、でしたらお帰り下さい。ボルツワークの使者様、私は覚悟は出来ております」

お帰り下さいと扉をランに開かせるとファナは立ち上がった。しかし男は一向に立とうとしない。それどころか、自分に出されたお茶をすすりだした。

「なぜ、わたしがボルツワークの使者だとお分かりに？服も礼儀作法も言葉もリチュワード国のものと完璧に覚えたのですが」

「確かにあなた様の言葉、挨拶、礼、服にいたるまで完璧でした」「では、なぜ」

「私の侍女達がどう対応したらよいか困っていること、それに皇帝陛下に許しを得なくても私には会えます、後宮の中の内宮の者には公務があるので」

その方に直接許しを得れば皇帝陛下に許しを得なくてもよいのです。私の侍女は皆貴族の者ばかりです、普通の方なら挨拶も普段どおりですが他の国の礼儀は知りませんので」

「そういう事でしたか。ではこの国々の重鎮の方々は皇帝陛下ではなく、直接許しを得るのですね」

「はい、そういうことです」「知りませんでした、そういつてスツと立ち上がるとファナに一礼して扉のほうに歩いていった。

「失礼ではないでしょうか？」

「まだ何か？」

先ほど使った言葉をもう一度ファナは使者に対して書斎の本を取りながら話しかけた。

「結局私に名前も言わずに去ろうとなさるなんて、ボルツワークの男性は皆このような方ばかりなのですか？先が思いやられますわね、

これから何かとお世話になりますのに」

くすつと本を見ながら笑った彼女にかの国の使者は少し苦さを覚えた。

「先ほどは失礼致しました。私の名はルイン・ハツシュワード、現ボルツワーク皇帝陛下の近衛隊隊長を勤めさせていただいております。私のことはルイとお呼び下さい」

「分かりました、ではまたかの国で」

そういつてかの国の使者はファナの私室を去っていった。

あんな細い腕でよく隊長が務まるものだとファナは思ったものだが、それはおいおい分かるものとして、自分の妃になる人に偵察を入れてくるボルツワークの皇帝はどんな人なのか疑問がファナの中で膨れ上がっていた。

冷酷非情？

「君にお似合いなんじゃないかな？彼女」

なぜこの男は俺が今問おうとしたことを先に口に出来るのだろうか。グレイス自身、他人に流されたり凶星を突かれたりすることはまずない。

これでも賢帝といわれているだけあつてときに非情といわれようと他国に恨みを買われようと国の為をやつてきた。

それで周りの国々からからは冷酷非情とされるのではないかと思ふのだが。

でもこの国の若き近衛隊長にはすべてお見通しのようだ。こんな奴と十数年一緒にいて、また国政にも論議を身分の差はあるけれど対等に交わしている自分に静かながら賛美したい。

そんなことは絶対に言わないが。

でもそんな気持ちも見抜いているであろうルイは皇帝の私室でくつろいでいる。

「そりゃしょうがないよ、十何年もいれば自然と相手の心なんて読めるもんだよグレイス」

「それはお前だけだ」

ガクつと首を垂れて椅子に腰掛ける。また読まれたと嘆く姿を側に控えている女官達がぽうと見惚れているのにも気付かず……。

「俺はお前から見るとちゃんと皇帝らしく見えるか？」

「うーん、僕からか難しい質問だな。でも大丈夫、この国の人達からは君は絶大な人気を誇っているから多分そう見えるよ」

「つまり、お前からはそうは見えないと」

「結果的にそうだね。でもグレイス、僕の前と他の人と会うとき君、全然態度が違っじゃないか、それを比べるといわれても」

お前の前と同じ姿でなど居られるかと心の中で悪態をつきながら頬を小突いた。

それこそここまで築きあげてきたものが一気に崩れ落ちてしまう。

「で、結局のところどうなんだ、かの国の姫は」

「だからお似合いだって」

「お似合いだけでは意味が分からん、説明願おう」

「いくら十数年来の付き合いだけど、君に願われたら拒否出来ないの」

そついう他の人使って相手を分析して対策するとか考えたりすることだけは相変わらず上手いなあ僕でも真似は出来ないとルイは感心したように頷く。

「自分の后となる相手くらい偵察してなにが悪い？」
「でもそれすつごく失礼だよね」

こういうところが本人はそのつもりは無いといっているけども冷酷
非情と噂される原因なんじゃないかとも思うのだが
それは心の中に隠しておこう。

「はっ、べつにばれたわけじゃないんだろっ？」

なら問題ないだろうというグレイスにルイは苦笑いして返す。

「ばれたのか？お前が？」

これ以上開かないほど目を見開いてグレイスはルイをみる。

「残念ながら、すぐにばれたよ。僕が驚いたくらいさ」

両手を広げて降参ポーズを見せたルイにグレイスはそうかと頷いた。

「そうだねえ、君が普段している態度とそう変わらないよ、一応彼
女は正妃の第一皇女だしねえ。

裏はいろいろありそうだけど・・・、身分ははつきりしてるし皇
族としての責務を十分理解してる。

僕にしては後宮に閉じこめて置くのはもったいないくらいだよ
っと賢すぎて堅いけどね」

これから楽しみだなあ

と他人事のように、まあ他人事なのだが笑いながら残っている書類に目を通すルイに

グレイスは今日何回目になるか分からない盛大なため息をついた。

「お前と話あっているといくつ脳があっても足りん」

「それはどうも」

「褒めてない」

どうしてそう受け取れるのか、グレイスはルイの思考回路を探る。でも答えは決まっただけで分らない。

探っていることがルイには分かるからそれがまた面白い。

こんな感じで十数年もルイはグレイスに付き合っているのだ。

それである彼の国の姫が入ってくることでどのようになるか考えるだけで

興味をそそられる。

「いつ来るんだ？」

「君そんなことも知らなかったの、自分の后様だよ」

「俺が決めたわけじゃない」

ルイが拗ねたようにふいと顔を逸らしたグレイスにお願いだからそんな態度みんなの前では出さないでよと注意すると「するか、そんなこと」と怒鳴られた。

そんなに怒鳴るくらいなら自分の前でもそんな態度をとらなければいいのと思うがそれは絶対に口にはしない。

分かっているからだ、グレイスがここでしか本心をだせないのを。別に本人は皇帝という顔とルイの前との自分を苦には思っていないと思う。

それにそれが自分だし、もしかしたらルイがいなかったらいいであれが本当の素だったのだろうとも思う。

それにどっちもグレイスはグレイスだ。どっちも素なのだ。でもその背中には皇帝という重い責任が押し掛かっている。

自分はその吐き出し口になればいいとルイは思い続けている。実際そうグレイスが思ってくれてるのかという疑問なのだ。いろいろな事情を抱えて嫁いでくる彼の国の姫がグレイスにどのような影響を与えてくれるのかルイは楽しみで仕方ない。

願わくは、二人が・・・

冷酷非情？（後書き）

やっと皇帝が出ました。

二人が出会うのはもうちょっと先になるかと思います。

1ヶ月に3回くらいで更新したいなあ

出発の朝

「皇帝陛下より降嫁される第2皇女様に簪が贈られた」

「いよいよ輿入れも近いということだな」

どこからかそんな声が聞こえる。

降嫁？

国と国との婚姻が降嫁？馬鹿馬鹿しい、どこまで自国を上に見ていることなのだろう。

お気楽な者にも、あらかた慣れてはきたが鬱陶しいには変わらな
い。

でも人々が降嫁といってしまうのも無理はないかも知れない。

おかしいとは思ってはいても実際口に出すなんて余程の馬鹿だけだ。
だって簪を贈られたのは事実なのだから。

簪はこのリチュワード国、皇室において降嫁を表す。神の子孫として神話などにも登場してしまっているリチュワード国の皇室は神占いという名の預言者を召抱えている。そして皇族の者が生まれた際、その者の予言をしてもらうのだ。その時に自分が何の神の子孫であるかが決まる。

現皇帝はゼウス、前皇后はメーティス、現皇后はディオオーネー、そして第2皇女ファナは、知恵、芸術、戦略を司るアテナの称号を貰っている。

前皇后といのはファナの本当の母で本来の正統なら生まれが他の皇女より遅くてもより直系に近いファナが第1皇女なのだが第1皇女は現皇后の生んだ皇女という事になっている。

そんなことはファナはいつでもよかったのだが……。
やはり敵国に行くとなると自分が第1皇女であればと思ったことは
否定しないでおこう。

「明日なので、あちらの使者様を姫様をお迎えにいらっしやる
のは」

「ラン、そんな憂鬱そうな顔をしてはいけません、あちらの方に失
礼でしょう」

「ですが、姫様」

「私はあちらに行くべきなのです。皇后様、お義母さまは私を疎ん
じていらっしやるから」

「姫様が正統な第1皇女様です」

自分は何も悪いことはいっていない。そう目で言っている様にラン
は口を真一文字に結んで

そこに立ちほだかるように立っていた。ランは実は強情なのだ。

でもそんなことも羨ましいとファナは思う。自分にもこんな密かな
強さがあればと思う。

それがなかったから今の自分があるのだが。

「もし、それでも」

「姫様？」

「そうであっても、私が第1皇女でも私が行くことは間違いなかつ
たでしょう。いずれ邪魔

になる私をお父様が放っておくはずがないでしょう」

「……………」

とりあえずここはランを黙らせるように、それなりに自分の意図に
気付けてもらえるように

言った言葉だったが、自分に言っていたのかもしれない。

自分は邪魔者、過去の者の遺物なんだと

だから余計な期待などするなと

「私は明日の支度をします。ランも明日の支度は整っているの？」

自分の邪念を攫い払って話題を無理やり変える。

アテナなんていう知恵の女神の称号を貰っておきながら、
話を変えるのにこんな方法しか浮かびつかない自分に反吐が出る。

「あつ、ま・・・まだ・・・」

しかしそれなりに効果はあったようでランは慌てながらピューとど
こか走り去って行ってしまった。

これでやっと一人になれる。

ランが邪魔なわけではなかったが案外慣れしたしんだ間柄でも一緒
にいるのは疲れるものだ。

ようやく自分しかいなくなったところでファナは深いため息をつい
た。

「姫様、起きて下さい。朝です」
まだ眠たい目をこすってファナはもぞもぞとベットの上で動き始める。

「おはよう、ラン」

欠伸をかみ殺して手で口を押さえる。

ランはもう一度「おはようございます」と返しすぐさまファナの後ろに立ち髪を結び始める。

「いよいよですね」

「何が？」

「何がじゃありません、今日なのですよ、出発は」

後ろを見たら何かに構えるように今にでもチョップをくらわしそうなランに苦笑いした。

「戦うわけではないのよ、ラン。これからはあちらが自国となるの」
「ですが」

ランが不満げなのが手に取るように分かる。直球すぎるのだ。でもそこが見放せなくて、

世話をしてくれてるのはランなのだがなぜだか自分の妹と接しているような気さえしてくる。

「聞いておられますか？」

「えっあつええ、聞いているわ」

「では続けますね」

いつの間違った話になっていたのだろう。しまったと内心自分を毒づく。ランにはひどくうろたえているように見えただろうか。

ファナは何かひとつ考えたとそのことにしか頭が働かなくなるのだ。昔の皇族の中にはいつきに12人の話を聞いたなんていう神みtainな伝説が残ってはいるが

あいにくファナはその力を受け継がなかったらしい。

「今日はこれからまずボルツワークからの使者様のご挨拶を頂きませす。それから皇族の方々にご挨拶

そして皇帝陛下にご挨拶をした後で、両国の契りを交わし親王宣下（内親王として皇帝に認められること）を受けボルツワークへ向かう事になっております」

「分かったわ」

なるべくさっきの失態をランに気付かれないように冷静に答えを返す。

これが公式な客人であったら間違いなくリチュワード皇室の質を下げていただろう。

こういう世界で生きていたファナにとってこういう醜聞は命取りなのだ。

たとえそれが、侍女の前であったとしても。

ランの話を一通り聞いて、部屋を出ていこうとした時にふと足を止めた。

「姫様？」

「ラン、この簪を外してくれないかしら。降嫁だなんてボルツワークの方に失礼だわ」

「しかしそれは皇帝陛下から頂いたものですよ、いいのですか」

「いいの、これがボルツワークから来てくださった者への配慮、そしてこの国との別れを示すことになるだろうから」

「分かりました」

そう言うとランはすつとファナの髪から簪を抜いて新しい簪を挿し直した。

「本当にこれでいいのですね」

ランの再度の問いかけにコクリと頷くとファナは扉を開け一步を踏み出した。

決別しきれない心

式が始まるまでファナは貴族の謁見を受けていた。

「お美しい、さすが先代の皇后様の姫様ですね」

「そんなことございませんわ」

「その簪もとても豪華で流石、皇帝陛下が自らお選びのことは、^ごぞいますね」

「ええ、私にはもつたいないくらいです」

「とんでもございません、皇女様のためにお作りになられたのですから」

ファナは心の中で先ほど謁見にきた貴族を心の中で笑った。何もこんな両国の者がいる謁見の場で今はまだ自国であるリチュワード国の教養をひけら

かすべきではない。まあ、その間違った本人は間違ったことにも気付いていないだろうが。普通、降嫁の簪は龍が刻むことがきめられている。しかも

朱色でこれはどんなデザインにしるどこかに付いているものだ。しかし自分の付けている簪は朱色が主体ではあるが龍ではない。遠くからみていたら

気付かないだろうが、さきほどのようにじつと見て気付かないほうが珍しいというものだ。しかし、この簪も前皇后の形見という意味ではとても大切

なものだ。さっきの貴族も前の貴族も気付いていなかった。自分の国にろくに使える貴族はいないのかと飽きたものだ。なぜかという^と皇族降嫁

の簪を付けていないのは別れという意味も勿論あったが、それだけのためにそんな愚かなことはしない。試すためだ。あちらの国行く

ときファナは誓

った。あちらの国でなんと少しでも生き抜いて、あちらでリチュワード国の皇女が生きた証を残す。礎を残すと。でもそれには少なからず、あちらで

も少し融通が利きそしてこちらでも多少権力があり、絶対に裏切らない賢い後ろ立てがいる。まあファナにも協力してくれている後見人がいないわけでもないのだが。

「ねえ、ラン式はまだ始まらないの？ いったいいつまで貴族様のお相手をしなきゃならないの」

少し嫌味っぽく頬杖をついて後ろに控えているランに話しかけた。

「はあ、まだ当分は謁見が続くかと・・・」

自分で行くと決めて臨んだはずだったのにこつも長いと行きたくないと思う気持ち膨らんでくる。そんな気持ちを振り払うようにつと振り返って姿

勢を正そうとした所でファナの動作は止まった。

「オルマンお兄様・・・。それにフレアも」

「久しぶりだね、ファナ」

「お姉様、ご機嫌いかがですか」

数秒、動作が止まった後ファナは再び動き始めた。皇族への挨拶はこの後だったからそのときでいいと思っていたのだが。いまここでこのリチュワード

ド国の皇太子で実の兄であるオルマンと義母姉妹であるフレアが挨拶にくるとは思わなかった。

オルマンはファナを見つめふつと表情を緩めた。

「綺麗だ、こんな唐突でしかも異国でなければこんなに悲しむこともないだろうに。濟まないファナ、私の力が足りないから」

「お兄様、こんな私にお情けをかけてくださるなど、もったいなきお言葉でございます」

「何を堅苦しい、実の兄妹だろう。それに私はお前の後見人なのだから。もう少し兄を頼ってはくれないのか」

「いえ、お兄様、わたしはお兄様にお助けをたくさん頂きました。十分でございます」

ファナは深々と頭を下げた。本当にオルマンには助けてもらった。同じ前皇后の子でも幼く力のなかったファナの後見人に皇太子になつて間もない時

期に自ら名乗り出てくれたし、現皇后に毒殺されそうになったときにも自分の近衛隊の一部隊を当ててくれ、そしてその後もそのまま護衛を就かせて

くれている。そんな人にもうこれ以上なにを言うことができるといふのだろう。それに横に並んでいるフレアも自分を姉として慕ってくれているし、

その母である現第2皇妃も母のいないファナに母親のように目をかけてくれた。

だから「お姉様はご自分でなんでもしすぎですわ、もう少し頼ってくださいでもいいのでは？」というフレアの疑問がよく分からない。貰ってばかりな

のにこれ以上どうやって頼ればいいのか？

「なにかあればすぐに文をだすように、いいねファナ」

「はい、そのようにさせていただきます」

「お姉様、私にもですよ」

「分かっているわ、必ず季節の変わり目と何かあったら連絡するわ」自分を忘れられていたことに気付いたのかずいと身を乗り出して頼

を膨らませながら言うフレアにふっと頬が緩んだ。

「あの姫様、そろそろお時間が」

先ほどまでファナの隣で息を潜めるように控えていたランが遠慮がちに声をかけた。

「ああ、そうだね。忙しいのにすまないね、私たちの挨拶のときにすればよかったね」

「いいえ、そんな事ありません。嬉しかったです、来て頂いて」
「では失礼するね」

名残おしそうに足をあげ動き出したオルマンは背を向けてフレアと一緒にファナの席から離れて皇族の席に戻っていった。

出発の儀はなんの問題もなく形式通り行い終わった。

こんなものかと少し拍子抜けしたぐらいだ。ファナが最も嫌いとする敵かで盛大なパーティのようなものだと思っていたのだが。

結果だけを言えばこれでよかったと思える。それ以上は意味もないし、したくもないと自分で勝手に結論づけさせた。

最後に残っている皇族への挨拶だって少し第一皇女と現皇后に嫌味

を言われるくらいで自分の父親である皇帝はおそらく形式的に誰かが書いたであろう

う文脈をなんの感情もなく読むのだろう。

「あら、噂をすれば・・・だわ」

そう言つて遠くから仰々しく並んで歩いてきた第一皇女とその取り巻きをにらみつけた。

「ファナ様、おめでとうございますわ。しかしあの国ではねえ、あそこは野蛮な者が多いでしょうに。あちらの皇帝も戦争にばかりお出になつてその

妃となるファナ様はご心労が耐えませんわね」

「お気遣いありがとうございますわ、皇女様。しかし私のご心配は無用ですわ、私はお国のために行くのですから。それよりご自分のことを第一にお

考え下さい。貴方様がなさることはすべてよい事も悪い事もすべて国のためとなるのですから。例えば夜会に意味もなく毎日出られることなど」

「そつそれは・・・」

「貧しく苦しんでいる民のためになさっているのですわよね。私も見習いたいものですわ。その無神経さというか、図太さ？」

「・・・っ。。よつ用事を思い出しましたわ。しつ失礼しますわ」

「いつも夜会で見る気位の高そうな顔が歪んでいたのは実に面白いものね」

キュと口をしめてこの場を逃げるように去つていった第一皇女を思い出したようにくすくすと笑い出すファナはどこか楽しそうだ。ランは少しだけあ

のいつも嫌味を言ってくる第一皇女が哀れに思えてきた。

「さてあとは、皇帝陛下へのご挨拶だけね、これはこちらに来てく

ださるものではないから行きましようか、ラン準備とあちらに知らせを」

「はい、かしこまりました」

さきほどのやりとりのことが嘘のように特別険しくなった表情に反応して周りがそそくさと動き始める。それに合わせてファナは腰を上げた。

「第2皇女、ファナ・リチュワード・アテナ参りました。皇帝陛下お目通りをお許し下さいませ」

「入れ」

わずかな間のあと返ってきた言葉はこれだけだった。とりあえず扉の奥に行かなければ挨拶は出来ない。まああちらは薄絹で面を蔽いこちらからは表情なんて見られないのだろうが……。とりあえずファナはその声に従った。

すつと進み出て頭を垂れる。

「面を上げよ」

その声が聞こえたのはファナも意外だった。もうずっとこのまま頭を下げたままでなんの感情の欠片も見あたらぬ文脈を聞くだけだと思っていた。

「皇帝陛下にはますますご壮健のことと存じて」

「そのような挨拶は構わん」

「失礼致しました」

話の途中で区切られてしまった。自分の父親が形式的だとは露ほどにも思っていないが娘が最後の挨拶をしようとしているのに、途中で区切ることはな

いだろう。それにもうこれ以上前置きはいらないと分かった以上、フアナは喋る言葉を失ってしまった。

気まずい沈黙が流れる。

「フアナ・リチュワード・アテナ」

「はい」

「なぜ、汝は吾が贈った簪をつけておらぬ？」

突然何を言うかと思つて下を見つめていた顔を上げてみれば、薄絹を面から取っておりじつとこつちを見ていた。正確に言えば簪のない髪をだが。

「私にはもつたいたないものだと思いますので失礼を承知の上で別のものと取り替えさせて頂いた所存です」

「それは、皇后のものだな」

「覚えて・・・おいででしたか。母、いえ今は亡き皇后陛下の形見の品でございます」

驚いた、正直に。この簪はいつも母が気に入って使っていたらしいものなのだ。らしいというのはフアナが幼かったため覚えていないのだ。オルマン

が母の部屋からフアナ宛てにかかれた手紙と簪を内密に持ってきてくれたものだ。それを覚えているとは、母のことなど忘れていたのだと思つた。

「皇后の件のことうらんでおろうな」

「いいえ、皇帝陛下のせいではございませんので」

「よい、恨めばよい。何にせよ吾が絡んでいる、吾が知らぬところでも・・・な。汝のこともそうだ」

気のせいだ。一瞬、この人が切なそうな顔をした気がした。あるいは

ずがない、そんなこと。そうだ、ありえない。大切にしてくれていたら、自分は
いま頃こんな嫌な思いはしていないし、放っておかれるはずがない。ましてや敵国に嫁がせるなんてまずないだろう。

「気にしておりません。それに私はこれから別の国に行くのです。皇帝陛下のお手を煩わせる心配もなくなり少し安心いたしているくらいです」

「吾が汝がいて迷惑しておったとでも汝は思っていたのか」
今までずっと感情を出さなかった皇帝が怒っているように見えた。でもそれは癩癩を起こすような感じではない。どこかもつと身近にいる人への怒りのように思えた。

「いえ、いつも私は後宮の奥に閉じこもっていただけの者でしたから」
嘘は言っていない。自分は先代の皇后が亡くなって数年後に来た今の皇后に出来るだけ存在を示さないようにしてきた。自分が皇位を狙っているなんて

露ほどにも思っていない事を知らせるために。現に昔は頻繁にあった皇后と第一皇女からの嫌がらせも少なくなってきた。それに後宮の奥に部屋を
移るように命じたのは皇帝ではなかっただろうか？

「吾がなんのために汝を後宮の奥に移るように命じたのか分からないのか」

「分かり・・・ません」

「そうか、もう下がれ」

「はい、失礼いたします」

もうこれ以上頭を上げて話せそうになかった。分かってしまった。あの人の意図を、考えていたことを。あの人の前皇后への気持ちも俯いてそれだけを言うとならば逃げるように謁見室を飛び出して

行ってしまった。

もうこれが親子として分かち合える最後だと知っていたのに・・・。

あれからもう一度オルマンなどから挨拶をつけファナはあちらからの迎いの馬車に乗った。

心はリミシヤールを捨てきれずに・・・。

決別しきれない心（後書き）

少し更新が遅くなってしまいました。

思い、出会う

「どうかされましたか？」

「いえ、大丈夫・・・っ!？」

はっと気付いた時には、馬車の中のみんなが自分のことを見ていた。それに自分がいま誰と喋っていたのかも。

「ルイ殿が迎えに来てくださったのですか」

「そうです、先ほどからここにいたのですが・・・」

困ったようにあたりを見回す。みな、一様にそっぽを向いていたがランだけは心配そうにこちらの様子を伺っていた。

「少し考えごとをしていたのです。ご心配をおかけしました」

ニコリと微笑んでそれ以上追求はするなと存外に告げた。その意図を汲み取ったルイは椅子に座りなおす。

また沈黙が流れる。

ファナ自身がおしゃべりが得意なほうではないし、放っておいてくれた方が今は有難かった。

じよじよに景色が変わってくる。

清らかな清流が流れるリチュワードから諸国を挟んで陽が照りつける熱帯のボルツワークへ、ファナはただただその景色を眺めていた。

「姫様、ご気分が優れないのではないのですか？」

「大丈夫よ、ラン。それにそんなに心配されるほうが気がめいるわ」

「しかしお顔が」

「いいと言っているでしょう」

「はい、申し訳ありません」

罰が悪そうに俯いたランを見てため息をついた。

ランに心配されるほど自分はこんなにも脆い人間だっただろうか。あるいはいつからこんな人間になっていたのだろうか。

あんな父親と言えるかどうかも分からなかった人に国を出る直前に父親らしい心配をされて混乱している自分がいる。情けないと思うでもその気持ちを振り切れない自分がまだここにいる。そこをいつもいるランはともかく、今というか最近会ったルイにまで気付かれてしまうとは、ど

れだけ自分は思い悩んでいたことが容易に想像がついてしまう。

今、それを吐き出せたらどれだけ楽なことが。しかしそれを出来ない立場にファナはある。それを祖国も望んではいないし、ボルツワークの人々も望んでない。

自分は仮の平和のための人質なのだから。

そんな思いも知らず自分を政略のための道具として呼ぶあちらの皇帝に段々とイラついていた。

「もうすぐ着きますよ。皇后陛下」

「ルイ殿、まだ違うわ。立后式を終えてないもの、ファナで構わないわ」

いきなり、かしこまったルイに手で軽くけん制して窓の外を眺めた。確かにもうすっかりリチュワードの面影など見当たらないほど景色が変わっていた。外では子供達が駆け回っていた。

こんな景色を見たことがなかった。リチュワードは格式の高い国。子供達でも外に出るときは剣舞の練習か馬術の嗜み程度でみんなで駆け回るなど聞いたこと

もなかったし、ましてや見たことなどあるわけがなかった。

「この子供達は何をしているの？」

窓の外を指差してルイに問いかける。するとルイは笑い始めた。

「何って、遊んでるんですよ。鬼かけとって、鬼が鬼ではない子供達を追いかけるんです。ご存知ありませんでしたか」

「ええ、初めて聞いたわ。そんな遊びしたことなかったもの、私はいつも内宮のさらに奥に閉じこもっていたから」

「そうでしたか、しかしこの国ではこれが普通なんです。子供は遊びが仕事ですから」

「そうなの」

ファナはもう一度外を眺めた。

楽しそうに子供達が遊んでいる。どうして国でここまで違うのだろう。リチュワードの人々がいうこの国の野蠻とはこのことだと思っただが、

ファナにはそうは思えなかった。

やりたいことをやって楽しそうにすることがなにが悪いのだろう。

我慢しているより全然いい。この国が発展を続けてきた理由が少し分かった気がした。

「着きましたよ。降りましようか」

ルイがさきに降りてファナの手をとる、そして地面に足を下ろした瞬間聴こえたのは、女官たちの悲鳴にも似た叫びと兵士達の「皇后

陛下に敬礼」という揃った声が混じった声だった。そのあとで「わたしのルイ様が」とか「ルイ様がわざわざお迎えに？」という雑音が聞こえたは聴こえたが……。

「随分と人気でいらっしやられるんですね」

「はははっ、それでもグレイスじゃなかった皇帝陛下よりは劣りますよ」

「皇帝陛下とはご親密なのですか？」

「ええ、昔からの幼馴染で、私の母は皇帝陛下の乳母をしておりましたから」

「では乳母兄妹なのですね、羨ましいわ」

「それを言ったらファナ様とラン殿だって、お心を通わせられたご親友のようにお見受けしましたけれど」

「ええ、まあそんなところね」

城の入り口に着くまでルイが手を引いてエスコートしてくれ、ファナは長い城までの道を歩いた。

「ルイ殿はエスコートは初めてではないですか？」

「ええお恥ずかしい限りですが、なぜそれを？」

「いえ、女官たちのあの様子を見ていたら分かります。まるで信じられないみたいな顔をしていましたから」

「よく、周りをみておいでなのですね」

「じゃないと、人の上に立つ者としては失格だと兄に教わったので、素晴らしい兄上だったのですね」

「ええ、本当に素晴らしい方ですわ」

「ではあなたも素晴らしいお方に違いない、そんな方の妹君であられるのだから」

「いいえ、そんなことはまったく……!?!?」

ルイと話していたのに、明らかに声の低さが違う。ルイはもう少し、高い声の持ち主であったはずだ。それがいま答えたのは大人びている低い声。

恐る恐る顔を上げてみると、ルイはもう後ろに控えていて、微笑んでいる。と言うことは、自分の横にいる男性ひとは

「皇帝陛下!!」

「わが国へようこそお越しくださった、リチュワードの姫君」

「皇帝陛下におかれましては初めてお目にかかります。皇帝陛下お導きの命の下ファナ・リチュワード・アテナ参上いたしました」

ふわりと微笑んで礼をとる。皇帝に対し最上級の礼をとりつつ皇族としての同等の立場示すように、膝はつかずぐつと背筋をのばしてそんな様子を皇帝、グレイス・ボルツワークは興味深めに見ていた。

それぞれの国の思惑を持って……

それぞれの思いを胸に秘めて二人は出会った。

思い、出会う(後書き)

誤字・脱字があればご報告をお願いします。
またご感想もお待ちしております。
来年もよろしく願います

皇帝の仮面

「姫、お疲れではないか？」

「お気遣い有難うございます。そうですね、少し休まさせて頂けるとありがたいのですが」

「分かった、今準備させよう、それまでは私の謁見室でお待ち頂くとしよう」

「ええ、そのほうが、私としてもいいですわ」

「では、そのように計らうように、聞いていたなルイ」

「はっ、かしこまりました。すぐに準備を」

二人を取り巻いていた護衛以外の者達が足早に準備に始めた。それに合わせて皇帝がファナの手を引いていく。

「姫、私の謁見室に着くまで城内を案内させて頂きたい」

「よろしく願います」

一見、他の者からみたら同等の立場だと見える。でもファナは分かっていた。この人は私《皇女》なんか見ていない。

その証拠にこの人は、先ほどから人の目をみて話してはいない。ずっと前を向いてまるで飼っている玩具のように首輪を引っ張るように私の手を引いている。

それならば、こちらの取る態度も決まっている。礼を尽くさぬ者に礼を返す義理はない。

「皇帝陛下、少しお伺いしてもよろしいでしょうか」

「ええ、お伺いしましょう」

「どうして私ごときの迎えにルイ殿を？」

「姫をお迎えするのには不足でしたか、それともあの者が何か粗相を？ご満悦いただけませんでしたか」

「いいえ、旅の途中も一度リチュワードでお会いした事があるのでお話し相手になってくださいましたし、ご存知ですよね」

そういつた瞬間、皇帝の顔に微かに狼狽の色が浮かんだ。

「それは・・・」

皇帝が口を開きかけた瞬間、官吏が謁見室の準備が出来たと報告にきた。

「その話は謁見室でということ、よろしいかな」

「承知しましたわ」

「で、どういう話だ」

謁見室に入った直後、人払いを済ませた皇帝はファナに向き直ると先ほどとはまるで別の人間になったように口調を変えて話しかけたきた。

少し驚いたがこれも予想の範囲内だったのでこのまま話を続けた。

「そのままの意味でお受け取り下さい」

「なぜ、ルイを偵察として姫の下によこしたか・・・ということだな」

「はい、そしてなぜ私ごときの迎えに近衛隊長でああなたの右腕であるルイ殿をお寄越しになったのですか」

「第一に、私の后になるにふさわしいかどうか確かめるために、その分では言えばあなたは不合格だったのだがな」

「不合格？それはどういうことなのでしょうか」

何もしていないのに相手に認められないとはどういうことなのだろう。ファナは口元に手を置いて首をかしげた。

「ああ、確かに姫には知性はあるようだ、だがありすぎても困る。私の政の道具まがはしらとなりえないからな」

それを聞いた途端カツと頭に血が上るのが分かった。人を道具扱いするこの男《皇帝》が許せなかった。しかし平手で殴るには距離が遠い。

一瞬の判断の後、気付いたときには皇帝の横の壁に自分の短剣が突き刺さっているのがみえた。

皇帝の横髪がなびいたかと思ったら頬からツウと血が落ちた。

ファナは懐にあつた護身用の短剣を投げた右腕を下ろし、再び座ると静かに口を開いた。

「あいにく、今はこれしかもっておりませんので、これで血を」

そういつて、裾からハンカチを取り出して皇帝に手渡した。

「話の腰をおつてしまい申し訳ありません。それで不合格の私を呼んだ理由は？」

謝る気などさらさらないことを相手に確認させた上でハンカチを渡す。その意図を読み取ったように皇帝は口角を上げて話を続けた。

「ルイが、姫のことを認めた。あやつは普通の者とは違う。そのルイが姫を認めた、これを私が否定すれば世継ぎがいなくなる。縁談の話についてはこ

とごとく大臣達の懇願を無視し続けたからな。これを逃したらもうないと喜んでいて、あの狸共が」

ちつと舌打ちした皇帝にファナはなぜか少しだけ親しみを感じた。

そんな気持ち振り切るようにスツと目を細める。

「だから、次は側室をと大臣達が望まないようにわざわざルイ殿を使つて私を迎えに？」

「よく、分かつたな」

皇帝、グレイスは驚きの目を隠せず目を見開いた。

「ええ、ルイ殿にエスコートされているときに私への嫉妬の視線とルイ殿の立場からおおよそ察しました」

「・・・それで？」

「ご自分のいわば私兵を使つてまで私を迎えに行かせたことで皇帝がどれほど今回の婚儀を望んでいるかを皆に知らしめたという所ではないでしょうか」

「見事だ。しかしそれをしつたところで姫はどうする」

「それほど大事にされているという設定なら、そのこと存分に使わせていただくだけでございます」
「・・・違うな」

急に空気が暗くなったのを感じてフアナは皇帝から離れようとするが、遅かった。
顎をつかまれ、無理やり引き寄せられた。

「なにをつ・・・っ!」

息が出来ない。

「はっ・・・ふっ・・・って」

離してと言おうとするのだが皇帝に無理やり口を塞がれてうまく言葉にならなかった。

「ケホツゴホツゴホ・・・ッ」

しばらくの抵抗のあとやっとな開放された口は空気を大量に吸い込みすぎて咳き込む。

「覚えておけ」

フアナが咳き込んで椅子からすべり落ちたあと 그레이スは立ってフアナを見下ろした。

「いくら、他国の皇族といえど、ここは俺の国。皇帝の俺と同等だと思ふな。道具としては大事にしてやる。大事な人質だからな。しかしそれ以上でも

それ以下でもない。あまりつけ上げるな。分かったな」

それだけを言うと 그레이スは謁見室から姿を消した。

「・・・最低」

ポツリと呟くとキィと扉の開ける音が聞こえた。

皇帝の仮面（後書き）

誤字脱字があればご報告をお願いします。

お読みいただきありがとうございます。

ご感想・コメントなどよろしかったらお願いします。

「思いはそれぞれに」

「少し、よろしいでしょうか」

遠慮ぎみに扉が開かれ誰が入ってきたかと思っただら入ってきたのは先ほどまで一緒に居たルイだった。

「皇帝陛下ならもういらっしやいませんよ」

「知っています。だからお声をかけたんです」

「用件を伺いましょう」

このやり取りを早く終わらしたくてファナは早口で喋る。その様子に気付いているのか気付いていないのか、いや気付いているだろうがルイはあく

までもゆっくと落ち着いた口調で話す。

「嫌いにならないで頂きたいのです。皇帝陛下を」

「私にあの方をお慕いもうしあげると？」

「はい、そうです」

ルイ自身もファナがイラだっているのは分かっていた。多分グレイスがまた「外面」（ルイいわく）で話していたのだらうと言うことも

想像はついていた。しかしここで引くわけにはいかない。ファナにグレイスの理解者になってもらわなければいけなかった。これは、ルイとある人との約束だったから。

「確かに外交上お慕いするように見せかけるのは両国にとって必要です。しかしそれはルイ殿のエゴではありませんか」

「分かっています、ですがどうしてもお願いしたきことだったので」「わざわざ来て頂き申し訳ないですが、ご協力できなくて申し訳ありません。しかしご安心下さい、皆の前ではお慕いするようにしますので」

だんだん熱を上げてきた話はなかなか下がることを知らない。そのことが分かっているファナは視線をルイから逸らした。

「お願いです！！陛下はあんな方ではないのです」

いきなり何を叫んだかとおもったら、ルイはファナに土下座をしてきた。

「お顔をお上げ下さい。陛下が本当はどんな方であろうと何をされても私の気は変わりません」

あんな方というあたり、先ほどのファナとグレイスのやり取りをルイは予想していたのだろう。だから土下座をしたのだろうとも予想がつく。

しかし何をされてもファナは頭を縦に振る気など盲等なかった。

「失礼します」

ファナはそれだけ言うのと部屋を出て行こうとした。するとルイはその出て行こうとするファナの前に立ちはだかった。

「何のつもりですか」

ファナはルイをにらみ付ける。それに負けじとルイもまっすぐファナを見つめ返す。

しばらく双方がにらみ合った状態が続いた。

さきに折れたのはファナでこれは諦めでもなんでもなく早く話を終わらせたいと思ったからだ。

「もう一度聞きましょう、皇族に対しての振る舞いではありません。どういっておつもりです？」

皇族としての身分をひけらかすのは好きではないが、使わざるおえないだろう。でなければ諦めてくれるとも思えない。

「ご無礼は承知しております。しかし、はいとおっしゃっていただけるまで通すわけには行きません」

「無理だとはつきり申し上げたでしょう」

「無理だとしてもです」

段々このくだらない言い合いに腹が立つてきた。ルイにとっては余程大事なものなのかも知れないがさつき道具と呼んだ相手をどう好きに

なればいいと言っただろう。

「無理だといっているでしょう!!」

少し・・・いやかなり強い口調でファナは足止めをしているルイをにらみつけた。

ルイは少し驚いたようだったがそれでも引く気配はない。ファナの怒りの頂点はもうそこまで見えていた。

「一国の軍の統帥が、恥を知りなさい！私は皇后となりこの国を統べる皇帝陛下の隣に立つ者です。これ以上の無礼は許しません！」

ルイは顔をあげ、呆然とファナを見る。驚いていることだろう。なにしろ自分でも驚いているくらいだ。

あちらに居るときはこんな大声をあげたことなどなかっただろう。それどころか言葉を発することも少なかったくらいだ。

言ってみたはいいものの、この後どうすべきか知る術をファナは知らなかった。

「失礼しますわ」

いまだに呆然としているルイを置いてファナは逃げるようにその部屋を出て行った。

「ご立派です。姫様よくぞおっしゃられました」

案内された部屋に入ってランに事の一部分始終を話し聞かせ終えるとランは嬉しそうに手をたたいた。

「でも、あんなに大きな声がでるとは私も驚いたわ。おかげですつきりしました」

「よかったですね」

そう言ってランはフアナにお茶を出し終えドアの近くに控えた。

「ねえ、ラン？」

「はい、どうかしましたか」

「もうあちらのようによそよそしくしなくてもいいのよ、こちらでお茶しましょう」

「そんな恐れ多い、私のようなものが姫様とお茶など」

ずるずると下がろうとするランの手を取って皇帝も座るような椅子に座らせた。

「ここはおそらく皇帝陛下もお座りになる椅子ではございませんか！ いけません」

また立とうとするランの肩を持ちもう一度椅子に座り直らせた。

「この皇帝はそこまでの価値は見当たらなかったわ、ランが座っても変わらない、だからいいのよ」

なんとも意味の分からない納得しがたい理由だが主の命は絶対だ、ランは恐れながらもその椅子に腰をかけた。

ファナは微笑んだ。どうやら満足したようだ。

「こんなこと初めてね、あちらではありえなかったもの」

「はい、とても恐れ多いことですが」

「そんなことない、わたしにとってこの国で今一番、影響力のある人はあのいけすかない皇帝でもなくランだもの」

「うれしきことでございます」

「これからは一緒にお茶をしましょうね」

「はい、お付き合いさせていただきます」

ここの部屋に案内され人払いしたあとのファナの機嫌の悪さは見られたものではなかったがとりあえず機嫌は治ったようだ。

この先、何も起こらなければいいが、と思うがその希望が裏切られたようにコンコンとドアをノックする音が聞こえた。

ファナはランに目配せしドアの前に控えさせた。

「何か用ですか」

入ってきたのは侍女だった。

「はい、姫様には今宵、伽に入られるようにとお達しに「ございませ」

これにはファナもランも驚いた、先ほど口論をしたばかりだから夜の相手をするなど頭になかったのだ。

「あんまりでございます、姫様は今日着いたばかりお疲れに「ございませ、今日だけは取り計らって下さいませんか」

ファナの命だったり、うえの命令には反抗しないランだがこのときばかりはファナをかばう様に口を挟んできた。

「そのことでしたら、お疲れのうえご無礼とは重々承知だが、ぜひにどの仰せでございました。伽に入られますようによろしいですか」

「分かりました」

今日だけは徹底抗戦でいくと思っていたのにファナはすんなりと受け入れた。いまの話を聞いていたからランはなおさら驚いた。

「姫様!？」

「では失礼します」

侍女が去っていったあとランはファナを振り返った。

「姫様よろしかったのですか、ありえませんかあんなこと」

「いい悪いの問題ではないの、分かるでしょう、私には「はい」の選択しかないこと」

そう言ったファナは笑っているように見えたが目は笑っていないかった。

思いはそれぞれに（後書き）

誤字脱字があればご報告くださると嬉しいですよ。

またこの話はあとで少し手を加えるかもしれません。

でも話の内容は変えないので手を加えてもわざわざ読み直していただく必要はないかと思えます。でも読みたい方はどうぞ粗末な小説ですがお付き合い下さい。

求め彷徨う

「では、姫様私どもはこれにて」

音もなく侍女達は退散していく。

深くため息を吐きファナはシーツの皺をのばす。いいと言ってここへ覚悟してきたつもりなのだがファナも落ち着かないのだ。リチュワードでは

結婚前に違う男性と肌を合わすことは許されない。従ってファナもまだ純潔を守ったままだった。初めてなのだ。怖くないはずがない。

「姫様、本当に大丈夫なのですか」

「ラン、大丈夫。あなたも下がっていいのよ」

そういつてもランは動かない。皇帝が来るまでここにいるつもりだろう。でもそれが今はとても嬉しかった。一人でいたらどうなったこと

だろう。取り乱していたかもしれない。そんなことは絶対にファナの性格とリチュワードが許すはずがないが、でもそれくらい不安だった。

「皇帝陛下のおなりです」

控えていて声をかけた侍女の言葉をうなづけるように遠くから幾つもの足音が聞こえてきた。これを皇帝陛下のおなりといわずして何と言つのだらう。

「ラン、下がりなさい。陛下がいらっしやいます」

「しかし、姫様」

「あなたは、両国の間に火の粉を振り掛けたいのですか？私一人が犠牲になれば済むことです。なにもあなたが心配することじゃない」
震えていることが分かっていて、怖がっていることが分かっていてランは自分を置いていくことなどできないだろう。しかし言わなければ自分も

もちろんランもただでは済まない。自然と声音も堅くとげとげした口調になっていくのが分かった。

「私は姫様の……」

最後まで言わせる前にファナはランから視線を逸らした。

「この子を連れて行きなさい、陛下にご迷惑をおかけしてしまうわ」
いつまでも出てこないランを心配してきた侍女にランを指差してにらみつけた。こんな顔をランにみせたことはなかった。驚いただろうことが

ランの見開いた目がありありと語っていた。でも苦しい思いをするのは自分だけでいいのだ。自分のわがままを聞いてくれ家族と離れこちらに来てくれ
たランにこれ以上負担をかけさせるわけにはいかない。

「早く連れて行きなさい」

ここで自分が少しでも弱い一面を見せたら、間違いなくランはどんな罰を受けても自分と離れないだろう。

だからこそ、突き放さなければいけない。

「私が陛下のお相手をしている間、自室に入れて見張りをさせるように。必ず一時も目を離さないようにいいですね」

「はっはい！！」

侍女はファナの声音に驚いたようにあわててランの手を取る。

ランの表情が驚きか恐れに変わった。でもなにも言葉も交わす間もなくランは侍女二人に連れていかれた。

ランは自分に絶望しただろうか。今まで一生懸命仕えてきた主人との絆がこんなに浅いものだったのだと思ってしまうだろうか。また前のようにランは自分に笑いかけてくれるだろうか。これからの伽の恐怖より今の出来事のほうがファナにとってつらいものだった。これで他の人が楽になる。そう思わなければ崩れそうだった。人間は所詮、もろく、儂いものなのだから。

「お前達はもう下がるがいい。朝までなにがあるうとこの扉を開けることは許さぬ、分かったな」

「はい、かしこまりました皇帝陛下」

王の護衛の者が一瞬チラツとファナを確認するように見た。逃げる事など出来ないと分かっているのに、逃げないと分かっているはずなのに。

護衛の者が去り、二人だけになった。

互いの視線が交じり合う。

さきに言葉を発したのはグレイスからであたりを見渡しながらファナに近づいてきた。

「リチュワードでは結婚が決まっていない男女が肌を合わせることは許されていないと聞く」

「確かにそうでございます、しかし私もあなたも同じなのでは？ここに側室はおらず、皇后も私が初のようにですから」

ファナは唇を噛み締めて震えそうになる声を必死に押し出した。

「では試してみるか？」

ギシツとベットが沈む音がした。そのままファナはなんの抵抗もする暇もなくグレイスによって押し倒された。

カタカタと震える手をファナは背中の下に押し込める。

「どうぞ、ご自由に」

瞑りたい目を見開いてグレイスをにらみつけた。

「怖くはないのか？」

「心は……。捨てましたので」

「ならば、遠慮は無用だな」

押し倒したファナを引き寄せ強引に唇を重ねる。グレイスがファナの背中に手を回した。

そのときにグレイスとファナの手が触れた。

ファナはすぐに手を引こうとしたがそれよりはやくグレイスが反応してその手を掴んだ。

「震えているな、怖いのか」

グレイスは口角をあげてニヤツと笑い掴んだ手をぺろっと舐める。

「怖くありません」

舐められた瞬間激しい吐き気を覚えたが冷静を装った。

なぜだろう。この男の笑いは何か癩に障り抗いたくなってファナは思いつき手を振りほどいた。

振り放されたあと、急になにかを思い出したようにグレイスは笑った。

「ふっ、そういえばお前の侍女……ランとか言ったか」

顔が固まるのが分かった、それと同時にファナの中に何かが湧き上がってきた。

ランになにかあったらそう思うと目の前にいる男が皇帝でも誰だろうと関係なかった。

「ランが……ランがどうしたのです!!」。

「侍女のことになると震えが止まるのだな、煩いくらいだ」

「……………」

本当にこの男はどれだけ人を馬鹿にすれば気がするのだろう。

それにお前などといつ誰がそうやって呼ぶことを許したのだろう。

そういうところもこの男の気に食わない理由の一つなのかもしれない。

「侍女達がそいつを引き連れて去ろうとしたとき私と目があってな。他の者は平伏していたがそいつだけは私を睨んできた。躡はしっかりしておけよ」

首輪をかけておくのも忘れずにな」

「ランは玩具トイではありませんわ」

さきほどより落ち着いた声で応える。震えもグレイスの言う通りおちついてきたらしい。腹立たしいことだが。

どうも自分にはカツとなってしまふものがあるようだ。それもこの

国にきてからわかったことなのだが。

「同じではないか、飼い主同様、私を目の仇にしている。私とて好きでこのようなところにきているわけではない。しかし仲がいいと噂が立つのは

いいことだろうか？」

「……」

この人の顔で分かる。

この人は何もかも計算して動いている。しかしどうということだろう。おそらくこの人は自国を強く発展させるためならなんだってする。

私《皇女》を毎日で

もここに呼んで愛でる演技も上手いだろう。実際そのほうが本性を出すより上手くことが運ぶ。でも、彼はそれをしない。彼は私を戦略のために呼んだのでは

なかったのか……。なぜ自分《皇女》をよんだのか、それに普通なら後ろ盾が強い第一皇女をと言ってくるはずなのにわざわざ後ろ盾のない自分を呼んだのか

意味が分からない。分からないことだらけだ、でもとりあえずはっきりしていることは自分はこの人が嫌いということだけだ。

ファナは勝手な自問自答の末、ひとつの答えを導いた。

「貴族対策ですか、ではここにきたことにしてこっそりお帰りなさればよろしいのでは」

「さきほどと比べ随分と饒舌になったものだな」

「お気に障ったのなら失礼致しました」

「まあいい、なぜか抱く気がうせた、今日は寝る。行火の代わりとなれ」

グレイスが言った意味が一瞬分からなくなった。それを頭で反復させている間にグレイスの手がファナの体を掴んだ。

「何をなされるので……っ！！」

ファナがすべてを言い終わる前にグレイスはファナを布団の中に引

き込んだ。

「離しっ……離して下さい」

「煩い、黙って私を温めろ」

さきほどと同じように振り放そうとしても手がしっかりと自分の腰に巻きついていて離れない。

ファナは奮闘したあげく無理だということがわかり、少し縮まってその場に落ち着いた。

「やっと止まったか、じゃじゃ馬め。そうやってはやく諦めて私の腕に収まっていればいいものを」

上から声が聞こえてきたと思ったらグレイスがこちらをみて眠たそうに欠伸をした。

「やっぱり、起きていらっしやっただんですね。お手をお離してください」

ぐるっとグレイスの腕の中で回って視線を合わせる。グレイスはそれを見てハッとファナを馬鹿にしたように笑った。

「考えてみる今宵は寒い、私に風邪を引かせるつもりか」

「寒いのでしたら別に私のところでもなくても、後宮にはいつでも陛下の慰めを頂戴したいと思っている女性はたくさんいらっしやるでしょう」

「煩い、私はここで休むと言っている。これ以上何も言っな」

そういうとグレイスはファナをさらにきつく抱き寄せた。

抱き寄せられながらファナは縮こまって考えていた。

まったくもって意味が分からない。この人は性欲解消でもなんでも

なく周りの体裁を気にして私を抱こうとしたのではなかったのか？
いつでも私を抱くことはできるはずだ。今この瞬間もそうすることは容易い。でもそれをする気はもうこの人にはないらしい。それなら意味がない

ではないか、自分は覚悟してここまでできているというのに・・・。
そこまで考えていままでの自分の考えを否定する。

ありえないそんなことを思うなんて、これでは……

これではまるで抱かれるのをまっていたかのようにではないか

ぶんぶんと首をふり考えていたことを忘れようとするがグレイスがガシツと頭を掴んだ。

「今日は疲れたであろう、それ以上からだを動かすな。ゆっくり休むがいい。明日はこのようにはいかんぞ」

いままでの言い合いは何だったのだろうか、グレイスはファナをもう一度今度は包み込むように抱きしめた。

これはどういふ心境の変化だろう。さきほどまで自分を抱こうとしていた奴が休めという言葉を自分に向けるとは。

「……………」

「聞いているのか」

「……………陛下のおっしゃる通り休まさせていただきますのでお静かにしてくださいませんか」

「ふんっ可愛くない姫だな」

「お休みなさいませ」

ファナはそのまま布団を奪い取り、寝る体制に入った。
上からはもう静かな寝息が聞こえる。

……もう寝たのか。

そんなことを思いながらファナは眠りについた。

僅かな兆候

チユンチユン

お母様、ねえ私はどんな人と結婚するの？決められているんでしょう？私はお父様みたいな人がいいな。

これは・・・子供のときの夢？でもあの城でこんな思い出は・・・。

そうね。お母様もファナには幸せになってほしいわ。

お母様は今幸せ？

ええとても。

そっかあ、よかった。

笑ってる？ここはどこ、私が住んでいたところにこんなに明るい場所はない。眩しい・・・

「っ・・・うん」

「何時だと思っっている。起きろ、これ以上寝ていたら犯すぞ」

とても皇帝の言葉とは思えないがその言葉をかけている相手はおそらく起きたときに覚えてはいないだろう。

「う？・・・ラン？眩しい・・・窓閉めて」

「俺を侍女と勘違いするな」

眩しい？眩しいとは今のことだろうか・・・！！？

「へっ陛下!？」

今まで寝ていたとは思えないほどファナは俊敏に動き深く頭を下げ

た。

「ようやく起きたか」

「申し訳ありません」

「くくつ、いい。おかげで面白いものが見れた」

恥ずかしさで頭が上がらない。夫と一晩寝て一番最初にでてきた言葉が侍女の名前だったとは……。グレイスでなければ笑いどころではなか

ったかも知れないのだ。自分の神経の凶太さに呆れた。

しかし彼にだけはなるべく弱味を握られたくはないのだが完全にと
いうのはどうも無理のようだ。

せめてグレイスも弱味のひとつぐらい見せてくれるといいのだが。

でもこの人は弱味など絶対にみせてはくれないだろうし、しかもとても計算高くてずるく恐ろしい人だ。気がついたら今まで笑っていた顔が嘘の

ように険しい顔に戻っていた。

「しかし、面白いものが見れたとばかり楽しんでいられぬのも分かっているだろうな。このようなことは気をつける」

冷たい声。人を従わさせる強い意志を持った口調だ。

これが彼を冷酷非情と噂させるひとつの要因なのだろう。何ものにも捕らわれず、誰も上ってこられない孤高の位置で下を見据えている。

さきほどまで笑っていた人間がここまで変わるものだろうか、それともこの態度は自分の前だけなのだろうか。

この人のせいでここまでついてきてくれたランとまで危うい状況になっているのにグレイスはちっとも被害を被るどころかどこか楽しげだ。

なんだか自分だけが馬鹿にされ踊らされている気分で作るせない気持ちにファナはなっていた。

「お恥ずかしき姿をお見せした無礼をお許し下さい、陛下のご迷惑にならぬように以後十分に気をつけますのでご安心下さい」

「いい、私は執務室に戻る。姫もなにかあればなんなりと尋ねて来られるがいい」

いきなり言葉の口調が変わったので何事かと思い振り向いた見たらすでに皇帝の護衛が扉の隅に立っていた。

ああ、やっぱりとしばらくの間一人で考えている間にグレイスはさっさと退室してしまっていた。

置いていかれたことに戸惑いを感じたが、侍女達が入ってきてずっとここに居るわけにもいかずファナは立ち上がった。

「なんなりと尋ねるがいい？」

尋ねられるわけがない。そんなことまでグレイスは分かっているのだろうか。

いつそ醜態をさらす覚悟で陽気に執務室に行けたらと思うが自分の自尊心のほうに圧倒的に高い。だからそれを許すはずがなかった。言葉にはしていなくてもファナの周りのオーラがどんどん濃くなっていくのが手に取るように分かる。侍女達が怖くて近づけないほどだ。

やりきれないファナの思いは別のところへ向けられようとしていた。

「ねえグレイス、いま僕悪寒が走ったんだけど…」

「知るか、それより今は狸じじい共をどうするかだ。姫を迎えるにあたっていろいろ煩い奴もいたからな」

俺のせいじゃないと言わんばかりの顔でため息を吐く。

ルイもその気持ちに分からんわけではではないが無視しておくのが最良の判断だと感じて話を変えた。

なにしろその結婚話にはルイ自身も深く関わっていることをグレイスは知らないからだ。

「それより僕、なんかこの部屋からでたくないな・・・なんて」

「じゃあ一生仕事してるか？それでもいいならの話だが」

「遠慮しておくよ」

先ほどから感じているこの恐怖はおおかた誰が発しているか分かってはいるものの未だそのいい解決策が見当たらない。

どうしたものかと悩んでいるとルイはグレイスの顔に何かみつけて固まった。

「グレイス、その傷どうしたの？」

「ああこれか、姫にやられた。敵意というか嫌悪の眼差しには気付いていたがまさかここまでですとは誰も思わない」

「姫もやるねえ。もうちよつと傷が深かったら国際問題だよ」

「深い、浅いの問題じゃないだろ。やる時点で国際問題だ」

本当に呆れたようにグレイスは深いため息をついた。

頭はいいのに少し抜けているというかズレているのがルイの特徴だ。

「そんなもんかな、というかグレイス避け切れなかったんだね」

「……うるさい」

ルイがくすりと笑うと不機嫌そうにグレイスはそっぽを向いてしまった。

「まあいいや、というかグレイスがそこでなにも処置を取らなかったことも意外だな。僕はやられたらとことんやり返す方だと思ってた」

ルイは意外そうに頷く。彼の頭の中では男だろうと女だろうとグレイスはやり返す（刺し返す？）ものだと思っていたらしい。

「俺も最初は怒りが収まりそうになかった。でも仕返ししたからな、それに昨日はいいものが見れた」

「仕返して大人気ない、相手は女性だよ？」

信じられないとも言おうように首を傾げる。しかしグレイスにとっではどうでもそこはいつでもいいことらしい。

「ふん、どうせ女なんて種残すための道具にすぎない」

「うわっ最低だね、男としても最低だし、とても皇帝の言葉ではないくらい下品だ」

「それが俺だ。それに昨日そうさせたのはお前だろ？」

「やっぱりばれてた？」

「当たり前だ」

グレイスは気付いて当たり前前のようにふんつと鼻を鳴らして目を通していた書類に再び視線を戻した。

「なぜ、初日に姫を伽に入れる必要があった？」

「賊が入ったと報告を受けてね」

視線はそのままグレイスは話を続ける。しかしさっきまでの笑いを含みつつの話はない。

「賊？近衛隊はどうしていた、それに城在住の護衛軍は」

「それが簡単に追い返せる奴じゃなくてね」

「ハアとため息をついているわりには声はどこか楽しそうだ。その声の調子の意味をすばやく理解したグレイスは実務をこなしていた手を止める。

「まさか、予定より早かったな」

少し驚いたように顔をあげたが予知していたことらしくすぐに視線を種書類に戻した。

「会わせるなよ、奴と姫を。絶対あいつは会いたがる阻止しろ」

「だったらもう一週間ぐらい姫といってもらっよ、その方が護衛も一箇所で楽だし、姫も何か起きていることぐらい感づいてくれるだろう？」

「そうなるといいがな、なにしろ姫は昨日俺が伽を命令したと思っているせいで嫌がらせだとしか感じていないだろうからな」

「姫は頭悪くないと思うよ。嫌がらせだと感じたのは君が昨日、彼女に何かしたからだろ」

「お前には関係ない」

「……………」

いきなりグレイスの心底冷えた声を聞いてルイはしまったと己の口を呪った。

男女の仲など、いくら親しいなかでも聞くものではないしまったことさらに皇帝と姫の間のことなど聞くべきではない。

自分の軽はずみな言動に悪態をついた。

「別にいい」

急に黙りこんでしまったルイが少し気になったのかグレイスは言葉
少なくルイに声をかけた。

「無粋な発言をしました、お許しを」

「だからいいと言った、これ以上この話はしないことだ。……まあ
だがあの姫はなかなかおもしろい」

許しを請うてきたルイに一言吐き捨てたかと思えば、グレイスは口
角を上げて笑い始め、さらに声をだして笑い始めた。

何が起こったか分からなかったルイはグレイスがついに壊れたかと
呆然と彼を見つめた。

「どうしたの、グレイス……」

「お前このあとどうするつもりなんだ、なんか嫌な予感がするんだ
ろ」

グレイスが放ったこの言葉でこのあと起こるであろう出来事を思い
出したルイだった。

足元の小さな咲き掛けの花に気付くのはいつだろうか
それはまだ誰も知ったところではない

願わくばその小さな花が気付かれず散ってしまうことのないように
その花が満開になるまでに摘み取られることのないように

僅かな兆候（後書き）

もうちょっと整理しながら書きたいと思います。

時間があつたら途中で整理していきたいと思います。何かご感想や

ご意見があればどんどん書いていただいたら嬉しいです。

次の次あたりで新しい人物が出てくるかもしれません。

嵐の予感

やはりルイの嫌な予感は当たっていた。

執務室から出て自分の仕事場に帰ろうと足を踏み出した途端彼女とばったり会ってしまった。

まるで待ち伏せでもされていたかのような、偶然とは言いがたい会い方にルイは苦笑いした。

「ファナ様、お会いできると思っていましたよ」

乾いた声で笑う彼の顔はこのことを予感していたことが分かるように引きつっている。

「あら、それは好都合ですわ。少しお聞きしたいことがありましたので」

偶然の出会いなのに彼女はやけに上機嫌に見えた。内心は怒り狂っているのかこの笑っている顔では判別しにくい。

頬に伝う汗を無視してルイは微笑んでいるファナに愛想笑いを浮かべた。

「私に用意された部屋でお話しましょうか、いかがでしょうか？」

彼女は疑問形を取ってはいるが、顔は反論は許さないと無言で告げていた。

仕方なくルイはファナの手をとって賛成の意を示す。

その様子に満足したらしくファナはルイにエスコートされるままに自分の部屋へと歩を進めた。

「信じられませんっ」

ファナは自室に着くなりルイのほうに振り返り大きなため息とともに抑えていた感情を吐き出した。ルイははあと返すしかない。ここまであらかさまに感情をぶつけるとは思わなかったからだ。ましてやこれは男女の話であって身分高き姫君が大声で話してもいい話題ではないと

一瞬思ったが、咎めるにも自分が言うのは立場上憚られるし、宥めるにしてもこの姫の機嫌を完璧に戻すことはできないだろう。

とりあえず今回はこの姫の気持ちがおさまるまで黙って聞こうと決め、促されるままに椅子に腰掛けた。

「配慮も遠慮も誠意も何も感じられません、ここでは初日からお勤めというのが当たり前ですか。それに陛下は私をどう見ておられるのかときどき

わかりません」

思っていることを洗いざらいはいた彼女は差し出されたカップを乱暴にとってドンツと机に置いた。

中の紅茶が波立つことなど気にもせずファナは話を続ける。

「私は陛下のことをどう思えばいいかわかりません。あなたが陛下のいいところを言っただけでも、

陛下の行動にはその欠片さえ見当たらないのです」

「わたしは、何を信じたらいいのでしょうか」
ポツリと呟いた彼女に一瞬、続く言葉が見当たらなかった。仕方なかったとはいえ今回の件をグレイスに提案したのは自分なのだ。だがそのことをファナに言えるわけもなく、かといってすべての責任をグレイスに押し付けるのはあまりにも理不尽に思えた。ただグレイスがファナの中で理解できない人物とされるのは耐えがたい。

「陛下は賢いお方です、なので今回の暴挙で恐れながらも姫様をお試し遊ばれたのでしょうか」

賢いといったところでファナは首を傾げて疑問符を浮かべたがそれは見ない事にした。

ファナからなにも言葉が返ってこないのを確認してルイは話を続ける。

「試すというのは姫様が今回のこと（伽）を命じられてどう動くか？というのが陛下の心の中にはあったようです」

自分がグレイスにだした提案を説明するわけにもいかず、今考えた苦し紛れの言い訳をファナに説明した。どうやらファナはその苦し紛れの言い訳に

納得してくれたらしく、頷くように考え込んでいた。

「私がどう動くか……？」

やっと言葉を紡いだ彼女にルイはにっこりと微笑んだ後、再び話を続けた。

「はい、姫様がこの伽を命じられて憤慨し怒ってお出ましにならなかったらこの婚姻に反対しているということですよ」

しかし姫様はラン殿と口論なされてまで命じられたことを守ろうとした。これで姫は我が国のお味方であると陛下は満足されたのでしよう。

それ以上のことは求められなかったはずですよ」

彼女の前で伽の話をするのは少し気が引けたがこれ以上、自分が考えた提案のせいでグレイスが悪者にされるのも許せなかった。

ファナは伽の話を出すと顔を赤らめたがそれよりは追求せず「そうですか」と頷いた。気は強いが、決して意地っぱりなだけでもないようであ堵した。

しばらくの沈黙が続いた後、ファナは口を開けた。

「分かりました、致し方なしということだったのですね。私の思慮も欠けていたことだと思えます、ルイ殿には迷惑をかけました」

ファナが謝罪と同時に頭を下げてきたのでルイは吃驚し慌てて頭を上げるようをお願いした。

「頭をお下げ下さい、知られたら意味のないこととはいえ、知っていたのにお伝えしなかったのは私です。許しを請うべきは私です」いきなりのごとで動揺して、慌てて頭を下げたのでいきおいあまり机の上に挿してあった花を倒してしまった。

侍女が花を挿しなおすのを見てさらに申し訳なく思い深々と頭を下げた。

いつ顔を上げればいいかと迷っていると頭の上から忍び笑いが聴こえてきた。

「ふふっルイ殿も意外に面白いところがおありなのです、いつも考えてばかりいる油断ならぬ人だと思っていました」

「お恥ずかしいところをお見せしました。ですが姫様にそう思っていただけなのは嬉しいことです」

振りつめていた空気がいつの間にか和やかな空気に変わっていた。

とりあえずファナの機嫌は治つたらしい。自分の失態で元に戻せるとは思わなかったが嬉しい誤算だった。

「お互い、少し誤解があったようです。試されたのは納得がいきません。がそれだけ慎重になっていたということが分かってよかったですわ」

顔をあげるとファナが微笑んでいるのをみてルイも微笑んだ。

「これからは」「今後は」

ルイが口を開きかけていたと同時にファナも口を開く。

互いに顔を見合わせてまた笑いだす、これ以上の言葉は必要なかった。

「では、また」

「ええ、こちらこそお時間を頂きありがとうございましたわ」

そう言つてルイと別れてから2時間がたった。しかし今ランがいない中話相手もいなければすることもない。どうしたものかと悩んでいると

一人の侍女が控えめながらも声をかけてきた。

「姫君様、まだ王宮の周りをご覧になっていないのではないのでしょうか？私どもが案内いたしますゆえ、一度外に足を運んではいかがでしょうか」

妙案だと思つたが、自分はまだ仮にもリチュワードの皇族であつてボルツワークの皇族ではない。そんな勝手が許されるのかと聞けば十分に姫を

もてなしできるだけのことは差し上げるとというのがグレイスからのお達しらしい。しかしあの一件で考えは分かつたがルイの言葉でしか聞いておらず、

ルイには心を許したがこのくらいの気遣いでグレイスを許せるほど自分は優しくくない。

ただただけるものは十分に貰つておこうと思ひその考えにのつた。

「ここが後宮でございます」

まだ客人扱いのファナは後宮には入らず他国の皇族の長期滞在の部屋に入っている。なので伽のときに入ったのは入つたがあれは夜のことでしたっきりと

後宮をみたのは初めてだった。

「意外に出入りの簡単そうなところにあるんですね」

意外だなと思つた。後宮といえどもっと守りの堅いものだと思つていたからである。

「はい、確かに以前までは4重もの鍵がかけられ入れるのも皇帝陛下のみでした、建物の損傷があった際にも女職人を召抱えて行っていたと聞いております」

「以前まではというのは？」

「そこまで聞くと侍女はその質問を待っていましたとばかりの顔をこちらに向けてきた。」

「それはですね、現皇帝陛下が廃止なさったからです。女性も才ある者は外に出すべきだと、それに連絡係が男性ではできないのは面倒だと仰せられます」

「して後宮の警護の者と皇帝陛下の許可状がある者、そして女性の皇族の方は入れるようになっていのです」

「そこまで言われて妙に納得してしまつた。」

「どうやら皇帝というのは女に溺れ自分の欲のみを考えるような馬鹿な男ではないらしい、確かにずる賢いところはあるが。」

「それにこの侍女のやけに熱心な熱弁はおそらく彼を慕つてのことだろう。国民からは相当な人気があるらしい。」

「それにですね、皇帝陛下は子供や女にも優しく、いままで女性に手をつけられませんでした。姫君様が最初の妻であり皇后様なのです」

「侍女の熱弁はなおも続くがそこには興味はない。別にほかの女性に手をつけても節操なしでも構わない、自分と彼の間には生まれる子供は少なからず」

「両国の期待を受け両国の統一を求められる運命にある、たとえ嫌いな人の子でも自分の子供にそんな運命を背負わせたくはない。」

「だからべつに側室を何人侍ろうが、子供を何人生ませようが自分が子供を生もうが生まないが関係ないと思つた。逆に自分以外の子に皇位を譲りたいくらいだ。」

「今はそんなことどうでもいいのだが。」

彼女の熱弁を聞きながらボンヤリと今後自分が住むであろう後宮の中を想像した。

しかしいきなり後宮のほうからバタンという音がして、その想像は途中で終わってしまった。

何事かと後宮の扉を見つめているとファナの正面を何人かの警護の者とあきらかに警護の者ではないと分かる上質の服をきた男が歩いてきた。

その男はこちらに目を向けるとフツと笑って近づいてきた。

「あなたは初めてみる顔だね、でも共の者が少ないから新興貴族のご令嬢かな」

そういつて再度笑いかけられた途端、今まで感じたことがないような悪寒が走り、背筋が凍ったのが分かった。でもここで引くわけにもいかず

ファナは相手を見据えた。

「わたしは、ファ……!」

「キル殿下! お久しぶりです」

自分のことを名乗ろうとしたとき、数時間前まで一緒にいたルイがどこからか慌てて走ってきた。

それと同時に城に来てまだ聞いたことのない言葉を耳にして困惑した。

「……殿下?」

フアナが首を傾げたのを見てキルと呼ばれた男がニヤツと笑う。
「じゃあ、また。グレイスのお姫様」

さりげなく手の甲に口付けしたあとキルと呼ばれた男は逃げるようにして去っていった。

挨拶で何度か手の甲に口付けをされたことがあったが吐き気を覚えたのはこれが初めてだった。ここまで気持ち悪いと思ったことはなかった。

気持ち悪い。

そう思っただけ自分の手の甲の穢れをなくそうと無意識に擦っていると、ルイが走ってきてそれをとめた。

「赤く腫れてしまいますよ、もう少しお体を大事になさって下さい。それとキル殿下に何か言われませんでしたか？」

やけに真剣に聞いてくるのでさつき感じた吐き気はどこかにいつてしまった。

「いいえ、ご挨拶はしましたけど」

「そのとき、フアナ様のご自身の名前はおっしゃいましたか？」

「いいえ、ちょうどルイ殿が来たので、それにキル殿下はすぐにごかに行かれてしまわれましたし」

「そうですか」

ホツとしたようにルイは息をつく。名前を言わないことでホツとするなんて少し不思議に思ったがあえてそれは聞かないことにした。

「それより、なぜフアナ様はこちらにいらっしゃるんですか？」

「いけませんでしたが？わたしは侍女の方が別に外に出てもいいと

陛下からお達しが出ていると聞いたので」

そうルイに告げるとルイは目を丸くした。

「そんなこと陛下から聞いてはおりませんが」

二人は互いに顔を見合わせる。その瞬間今まで近くにいた侍女が逃げ出した。

「捕らえる！その女を逃がすな」

今までに聞いたこともないようなルイの叫び声にフアナは狼狽た。

いつも彼は穏やかに話すのでつい近衛隊長という身分であることを忘れていたのだ。

「フアナ様は自室にお戻り下さい。あとは我々がなんとかしますので」

フアナはルイの機敏さに思わず身体が小さく震えてしまったが、「はい」と簡潔に返事をするいつもの冷静さを取り戻し残りの侍女を引き連れて

自室に戻るためにそこを立ち去った。

逃げる侍女の姿を目に焼き付けて。

城の数ある部屋の一室で二人の男が話をしていた。

「どうでした、ファナ様は？」

一人の男がキルと呼ばれた男に話しかける。

「よく分からなかった、途中で邪魔が入ってた」

「ルイ……………ですか？」

「そうだ、グレイスめ、あいつに張らせていたな。でも顔は分かった。あの侍女のおかげだな、褒美をやらせておけ」

そついわれた男は少し困った顔をした。それをみてキルは何かを思いついたように口角を上げた。

「廃人にならず、生き返ってここに帰ってくれば……………の話だな」

「御意、あなた様のもとにすべてのものを」

跪く男をみて満足そうにキルはその男を見下ろした。

嵐の予感（後書き）

すごく更新が遅くなってしまいました。

もっと早く更新したいなと思っていたのですが、文章がまとまらず一ヶ月もかかってしまいました。

粗末な文章ですがどうぞお付き合い下さいませ

警告と警戒

「それで。捕らえたのかその女」

「いや舌を噛み切った。してやられたよ」

今日のあらかたの出来事を聞いてそうかとだけ呟いてこの国の皇帝、グレイス・ボルツワークはふうと息を吐き出した。今一番起きて欲しくない出来事が起きてしまった。

「キルは姫に気付いていたか？」

「気付いたと思うよ、ファナ様は名前は言わなかったって言ったけど鋭いからね、誰かさんと同じで」

ルイはグレイスの方に視線を向ける。

認めるは認めるがあんな性悪な従兄弟と同じにされるのは不愉快だ。国のために何かすることはあっても自分の欲のために動いているだけの人間と同じにされて嬉しい人間などいるはずがない。

そんなグレイスの思惑を察したようにルイはいくつか束になった資料を掴み取った。

「僕なりに対策を考えてみたんだけど、グレイス一回目を通してもらえないかな」

強引に腕の中に収められた膨大な数の書類を見てグレイスは目を丸くした。

「お前、これいつ作った？」

「さっきかな、とりあえず女を生け捕りにしろって言って捕らえた

ところでグレイスに引き渡そうと思ってたんだけど舌噛み切っちゃったから、

その処理を部下に任している間だよ」

時間にして約三十分くらいだろうか、短時間でこんなに膨大な量をまとめあげるとは舌を巻くとはこのことだろう。

「分かった、目を通しておこう」

みとめたくはないが、自分の部下はそうとう優秀らしい。優秀でなければ使う気はないが。

グレイスは机に渡された書類を置き今日何度目になるか分からないため息を吐いた。

「グレイス、君さ一度きちんとファナ様と話したほうがいいと思うよ」

僅かに、目線を上げるとルイと目が合う。ルイの口角が少し上がったように見えた。

「キルのことを話せというのか、それこそ悩みの種がふえるだけだ」
グレイスは首を横に何度か振り頭を抱える。

「そこまで言わなくてもいいんだよ。ただいろいろ危険だからって、理由は言えないって言えばファナ様も理解してくれるはずだよ」

「そんなに簡単にいくような姫ではないと思うがな」

何を言うかと思えば、と少し呆れ顔でルイのほうに視線を投げるがルイには冗談で言っている雰囲気は見当たらない。

言えたらなんて簡単に事が済むことか、姫に協力してもらいこちらの手を汚さずにしかもみんなに歓迎されるやり方でキルを遠くにとばすことが出来る。

しかし、まだ自分に敵対心をむき出しにしているファナに言っても良くて無視、悪かったらキルと同調して自分に立ち向かってくるだ

ろう。

ファナの敵対心については自分が悪いのを認める部分があるが、キルについてはいつの間にか嫌われていたし自分のせいではない。

「話せば分かる人だと思うけどな、僕は」

「お前は人を甘く見すぎだ」

「そうかな？そりゃグレイスみたいに小さい頃に何度も命を狙われることなんてなかったけどさ」

自分の過去をむやみに持ち出されるのは気に入らないが今はそんなことはどうでもいい。

なぜファナに話すかどうかなんて一か八かの選択をルイが提案してきたのだろうか。考えるにルイはよほどファナのことを気に入ったみたいだ。

「でもしばらくは一緒に寝るんだから、話しておいて損はないと思うんだ。今後にも関わるしね」

正直、本当に優秀な部下を持ったものだとして少し呆れている。ルイは余計なことまで見えてしまうらしい。

「仕方がない、そこまで言うのなら信じてみようあの姫を」

「ありがとう、必ず上手くいくよ」

どこが上手くなどいくものか、と内心毒づきながらルイを見るがもうルイはその話題には興味を無くしたらしくすでに新しい書類に目を通してている。

もう少し真剣に話すべき話題ではないのかと思うのだがあえてそれを口にしようとは思わない。おそらくルイの頭の中でもう結果は見えていること

なのだろう。納得はしがたいがここは流れに身を任せようと心に決

めて席を立った。

「後は任せた、俺は少し用がある」

「分かったよ、残りの書類も君が帰るまでに片付けておくよ」

「頼む」

グレイスはポントと肩をたたき部屋を出る。

これはグレイスが信頼している相手に頼むときのやり方だ。それに満足したようにルイは新しい書類を手を取った。

昼でも薄暗い回廊をグレイスは歩いていた。

この城の裏側に位置するこの回廊はある人物が城に滞在するさい好

む場所だった。

「キル、いるんだろう？出て来い俺だ」

グレイスの凜とした声がこのあたりに響いて消えた。消えたと同時にグレイスの前に細く尖ったものが突き出される。

「いいのか？皇帝陛下がこんなところに一人で来て」

「構わん、それに一人ではないだろうな。影がいる気配がする」

なにかいわくありげな顔で口元を歪めたキルはグレイスの前に突き出した剣を鞘に戻した。

「不法侵入で討たれても文句は言えないぞ」

「ここは俺の城だ、それにここに訪れるものなど俺か貴様か幽霊ぐらいのものだろう」

さつき剣を突きつけられたとは思えないほど余裕のある顔でグレイスはキルを睨みつけた。

二人の間に沈黙が流れる。

その沈黙を最初に破ったのはグレイスでキルは開きかけた口を噤んだ。

「何を企んでいる………？」

「何も。と言えば皇帝陛下は安心して帰ってくださるのか？」

「これからの返答次第だ」

冷たい声音でそう告げるとキルははははと乾いた笑い声を漏らした。

「何がおかしい？」

さらに眉間にしわを寄せたグレイスなど気にもとめていないようにキルは笑いを止めない。気味が悪いと感じながらもキルの返事を待った。

「別に、皇帝が自らいち皇族に会いにくるなんて珍しいこともあるのだと思っただけ」

「昔はよく遊びに行っただろう、それと大差ないと思うが？」

「あれは互いにまだ事情を知らなかったからだ、覇権のことなど気にもしていなかった子供だったからだ」

「今は違つと？」

グレイスの鋭い質問が一瞬キルの動きを僅かに鈍らせる。その機会をグレイスが逃すはずがなくその質問に追い討ちをかけた。

「出自のことか？それで俺のことを貶めようとしているのならば」

「黙れ！！貴様ごときに話す話などない」

いきなりキルが語調を荒げ叫ぶ。キルにしては珍しく頭に熱がのぼり顔が赤くなっている。呼吸も荒く興奮しているのが明らかだった。グレイスは少しだけ驚いたように目を見開いたがすぐに目を伏せキルが落ち着くのを待った。

「お前が俺に嫌悪を抱こうと何をしようと俺は俺のものを何ひとつ失うつもりはない、そのために誰かを犠牲にしてもな」

遠まわしの宣戦布告をしグレイスはまっすぐキルを見つめた。ピンツとした空気が張り詰める。

「まあお前が何もしないのなら俺は手出しをする必要はなくなるのだがな」

「……………っ」

キルが何も言わないことを了承と受け、グレイスは元きた道を引き

返す。

「くそが、正統な後継者は俺だというのに……」
キルの憎悪に満ちた声は闇の中に消えた。

警告と警戒（後書き）

誤字脱字があればご報告くださると嬉しいですよ。

感想などいただけたらその感想を参考にさせていただきます。ありがとうございます。

変化と戸惑い

「そう、分かったわ」

今日も伽を命じられて報告にきた侍女を手で制止させて引き下からせるとファナは大きく息をついた。

その横ではランが自分の居場所を失ったように身を細くして立っていた。ルイに会ったときにランを呼ぶように頼んでおいたのだ。

しかし何か言いたそうにしているのは分かっているのだがどうしても互いにかけていい言葉が分からない。

もっともランは侍女なのでファナが話しかけるまで話してはいけな
いのだが。

いつまでこの沈黙が続くのだろうかと考えていると一本の桜の木が庭先から目に入った。

本来、ボルツワークには桜の木はないのだがファナが降嫁する際に1本だけ植えてもらうことにしたものだ。

「……………」

桜を見た瞬間、もう言う言葉は決まっていた。今までこんなにも沈黙が続いていたかすごく不思議なくらいにその言葉はすんなり出てきた。

「ねえラン？…久しぶりに花見がしたいわ、それでゆっくりお茶でもしましょうか？ラン」

「……………」
「はいっすぐ準備いたします」

一瞬呆気にとられたようにランは口をポカンと空けたがすぐにファ

ナに背を向けお茶の準備をし始める。

「ありがとうラン」

本人に聴こえるか聴こえないかで呟いたありがとうは不思議とフアナの心を癒してくれた。

「姫に変わったことはなかったか？」

さきほどフアナが下がらせた侍女はその足で皇帝が使う執務室に向かった。

「はい。特にお変わりなく健やかに過ごしておいでです。」

「伽には応じたか？」

「はい、承知しましたとのご返答を頂きました」

伽の伝令役に行かせた侍女に姫からの返答を聞いてそれならひとまず安全だな　とグレイスにしては珍しく安堵の息を吐いた。

なにしろ昨日の今日だ、あの姫なら伽をすっぱかすなんてことをするのではないかと少し心配していた。

「今は何をしていた？」

あの姫のことを気にする、いや人のことを気にするなんて自分の柄に合わないことは十分承知していた。今まで他人のことなどどうで

もよかった。

でもなぜだかあの姫の様子が気になって仕方がない。少し躊躇した
が結局聞くことにした。

「姫様は今、庭園で花見と呼ばれるものをしておいでです」
聞いたことがある。リチュワードでは春の季節に花を眺める習慣が
あるのだという。

この国は自然はあるがどちらかと言うと熱帯雨林が生い茂るサバン
ナの方に近い。だから花が咲くようなところはほとんどない。

「そうか……」

「……」

「下がっていいぞ、ごくろつだった」

「はい、失礼いたします」

今度は侍女が安心したように頷き執務室から足早に去って行った。

侍女という身分は決して低くはないがそれでも貴族や軍の者達との
差はやはりある。

皇族、ましてや皇帝ならなおさら侍女にとって居づらい場だったの
は間違いないだろう。

もう少しはやく返してやればよかったと足早に去る侍女を見ながら
そう思った。

自分ように用意されたお茶を一口啜り完璧に侍女の気配がなくなっ
たのを確信してグレイスは執務室を出た。

花見は風情のあるものだ。

この国の侍女に聞いたらボルツワークではそんな習慣はないと驚かれたが、やはりいいものだと言った。

その考えに同感してくれるのはこの城ではランしかおらず、結局二人だけのお茶会になってしまった。

二人が嫌いなわけでも大人数が好きなのでもないが花見はいつも皇帝直々のお誘いで皇族が集まっていたので二人だけというのはなにか変な感じがする。

前まではお花見がある度に嫌味を言ってきた第一皇女が懐かしく思えてくる。

ランとのお花見をしながらファナは久しぶりに落ち着いた休みを楽しんでいた。

「ふふふっ」

「どうしました？」

「昔のことを思い出してね」

「はあ」

「そうそう、あまりに腹の立つことばかりあったから忘れていたわ」
「腹の立つことですか？」

ランは意味が分からないというように首を傾げる。

それはそうだ。これはランがいないときにおきたものだからランが知る由もない。

「ランを連れてきてもらうようにルイ殿に頼んだとき、あの陛下から勅使がきてね」

「勅使ですか？」

これにはランも驚いたようで、目を丸くしている。そんなランの様子が可笑しくて自然と頬が緩んだ。

「そう、しかもその内容が私に外出を控えて欲しいとのことだったわ」

努めて明るく言っただつもりだったのだがランにはそんなに簡単に黙認できる問題ではなかったみたいで一瞬顔を強張らせる。

「そんな、」

ランの表情が曇っていくのが分かる。

こんな表情をして欲しくて言っただけではないが結果、自分のことを心配してくれているのが分かって少し顔が綻ぶ。

「大丈夫よ、ラン。あなたが気に病むことではないわ」

「しかし、伽の次は外出禁止ですか。陛下は姫様をどうなさりたいのでしょうか」

ランの目からはあきらかに心配の目から怒りに変わっている。

会わない数日の間にランも強くなったのだなと感じ取ったが自分の知らないランがいるようで妙に落ち着かなかった。

「分からないわ、でも私もそろそろ限界だわ。あの減らず口叩いてやりたいわ」

「……」

「それに外出禁止にしておいて退屈しないように計らっても下さらないし」

「……」

「ランもそう思うでしょう?」

「あっああそう、ですね」

なぜか急に大人しく返事がしどろもどろで目を泳がせているランを不思議に思ったがフアナは話を続ける。

このときフアナは気付くべきだったのだ。なぜランが曖昧な返事をしたのか。

「気に食わないのよ、あの人みたいな利己主義は」

「そつそつ…ですね」

「だいたい、自分の伴侶の様子でも見に来ようとはしないのかしら」

「お前が嫌がると思って今まで先延ばしにしていたのだが？」

「そつよ、別に来てもらっても困るけれど……」

「そつだろつな」

「つー！」

危うく、さきほどから手に持っていたカップを落としそうになる。ファナが固まったまま動けないでいると今まで話題に出ていた男、グレイスがなんの遠慮もなくファナの庭に足を踏み入れた。そして回転式の椅子をぐるりと逆に向き返す。

「陛下、いつからそこにおいでだったのですか？お呼びなら声をかけていただいたらよかったです」

混乱でパニック状態になっている頭をフル回転させて、愛想笑いを浮かべ挨拶をする。

冷や汗で背中がじとじと濡れているのがわかった。

グレイスはニヤツと口角をあげファナを見る。

そこから先ファナはグレイスから視線を離すことが出来なかった。

「なに俺は減らず口らしいからな、うっかり余計なことを言ってしまうわないように黙っていただけだ」

その言葉を聞いてスツと背筋が凍る。要するに聞いていたのはファナの愚痴の最初からということになる。

ようやくランが急に大人しくなった理由が分かった。

（ランもつとなんで分かりやすいように黙ってくれなかったの）

軽くランに悪態をついたがもう遅い、楽しそうに細められたグレイスの双眸は何かたくらんでいる。

「どうやら俺の後は退屈していらっしやるようだから、相手でもしてもらおうか」

「なっなにを」

そう言ったときにはもうファナの身体は持ち上げられていた。

「降ろして、降ろしてください」

「退屈しているのだろう？」

グレイスは咽喉で笑いながらファナの身体をお姫様抱っこで軽々と持ち上げる。

ファナはランに目で助けを求めるがとうの本人は自分の目の前で起こっていることが理解できず固まってしまっている。

ランに助けを求めるのは不可能だろう。

「ちよつ降ろしてください、お願いです」

なかば誘拐ぎみなことをしているとは考えられにくい足取りで堂々とグレイスはさきほど来た道を引き返そうとする。

ファナは最後の抵抗とばかりに思いつきり爪でグレイスの腕を引っかいた。

「お前は猫か……」

グレイスは一度立ち止まって一瞬痛そうに顔を顰めたがまた歩き出す。

「主人に盾つく玩具ペットにはおしおきが必要だな」

そういつてファナの首根の髪を一房掴むと首筋へ唇を寄せた。

「っあ……んやめっあ」

首筋を吸い付く感覚にぞくりと悪寒が走った。

ファナは抵抗したが所詮は男と女、力で敵うわけもなくグレイスが止めるまでファナはなすがままになっていた。

「やっめてくだ…さい」

最後のほうは多分涙目だったと思う。でもそれが功を奏したのかグレイスはファナの首筋から唇を離す。

するとグレイスの手がまたファナの頭のほうにのびてきた。ファナが反射的に身体を縮めると途中までのびていた手が動きを止めもとの位置に戻った。

「もうしないから、そんなに怯えてくれるな」

「はい……」

はいと返事をするしかできなかった。

グレイスが刹那悲しそうに顔を歪めた気がしたが今のファナにはそれを気にする余裕などどこにもなかった。

ただグレイスの服にしがみついて自分の部屋を後にした。

変化と戸惑い（後書き）

更新が遅れてしまいました。

想い溢れて

ここは

どこなのだろうか。聞きたいがさきほどのことがまだ頭から離れずなんとなく話しかけづらい。

そんなファナの様子を知ってか知らずかグレイスはファナを降ろし地に立たせてくれた。

「ここは……」

どこなのかという言葉を飲み込む。

目の前に小さな墓標が立っている。それで自分がどこにいるのかおおかた察しがついた。

「ここは、俺の母上が眠っておられる場所だ」

さっきのファナの問いに答えるようにグレイスが口を開いた。

ここにグレイスが連れてきた意味はまだ分からない。

でもここでそれを問いたとしてもおそらく答えを返してくれないだろう。やることがない代わりにファナは小さな墓標の前に跪いた。

そして無言で手を合わせる。

数分くらいそうしていただろうか、しばらく黙っていたグレイスが上から声をかけてきた。

「少し、話をしないか？」

さきほどのこともあってか少し遠慮がちに提案してきたグレイスにファナは無言で頷く。

ファナが頷いたのを確認するとグレイスはその墓標の少し離れたところに腰を下ろした。

二人きりで話すのはこれが初めてではないはずなのにどうしてか初めて話すようでひどく落ち着かない。

ファナはグレイスが腰を下ろした場所の隣に腰を下ろした。

「お前はリチュワードが好きだったか？」

「……分かりません、好きだったのか、ただ生きているだけの空間なんて好きと言えるのでしょうか」

グレイスの突然の質問にファナは何も考えず即答していた。

自分への自問のはずだったのに口に出してしまつて、ひどく狼狽する。

グレイスに答えを出して欲しいわけではなかったが、でも自分では分からなかった。

沈黙の後、ふいにグレイスが口を開いた。

「お前は国リチュワードが好きだったのだな」

ふと何かを思いついたようにグレイスが発した言葉はファナを混乱させるには十分なものだった。

「どうして……」

自分の声が震えているのが分かる。動揺を隠しきれないファナの瞳は大きく揺れていた。

そんなファナにグレイスはさっきよりも優しい声でファナに喋りかけた。

「嫌いだったらそんな分からないという表現は使わない、分からないのはそんなことを考えることもなかったほどに住みやすかったのだらう」

「……」

なぜグレイスがそう言ったのか分からない。でもファナはそれに肯定するように頷いていた。

「好きだったのかも知れません」

しばらくの沈黙の後、出てきたのは曖昧な言葉だけだった。

「今はそれでいい」

グレイスの声を風がふわりと優しく包み込む。グレイスの言葉はすんなりとファナの心の中に落ちてきた。

グレイスに「今はそれでいい」と言われとき、ファナはなぜか安堵していた。

頬から流れ落ちる涙にも気付かず

「あれっ…なっ……んでっ？」

涙に気付いて何度も涙を拭うが、とまる気配をみせない。そして落ちてくる涙は消えていた感情を溶かし始めた。

「いやっ…っ」

自分の感情の変化を認めたくなくて強く目を擦る。

あんなに嫌だと思っていた母国リチュワードなのに、自分を捨てた国だというのに、復讐を誓ってこの国にきたというのに。

グレイスは隠していた心を簡単に見つけ出してしまった。あんなに必死に自分から切り離そうとしてきた母国への自分を捨てたはずの家族への気持ち。最後に見せた父の表情、すべてが今いつきに溢れて止まらない。捨てられるはずがなかった。いい思い出がなくても自分の国はやはり大切なのだ。

静かな場所にファナの嗚咽が漏れる。

「っあ…っあ…っ」

ファナは嗚咽を堪えて手で顔を覆った。それでも頬に流れ落ちる涙は止められず、次々とあふれ出る。

その涙をグレイスは手で掬いそのあと力強い手で、優しくファナの顔を覆っている手を除けた。

「それでいい、泣けばいい。お前の泣く場所ならここにある」

「私はっ……なん…のつために……っ復讐をっ…それっだけ…」
嗚咽のせいでうまく言葉をつなげられない。

「そんなこともう考えなくてもいい。お前はここには自分と自国の平和のためにきたんだ。捨てられたわけではない、分かっていたはずだ」

そうだ、分かっていた

あの国にいればいずれ邪魔となるだろうと、皇帝になるオルマンも自分のことで苦労させるかも知れないと、それで自分を追い詰めてしまうというファナの性格を父は分かっていた。見ていないようでちゃんと見てくれていたこと。だからボルツワークという成り立ての国で自分の存在を必要としてくれるところに行かせてくれたことも、知っていた。なのにもないふりをした。

「いや…っわたしっはっ…っ捨てられっ」

「お父上がどれだけお前を心配しておられたか、分かっていたはずだ」

「そんなんっ…はずっない」

グレイスの言葉を手と言葉で拒絶するがその両方をグレイスは塞ぎこんだ。

それはいきなりの口付けで、ファナを黙らせるには最適だった。

「自分を……お父上がお前を心配なさってくださいった気持ちを否定するな」

もう一度触れるだけのようなキスをして嗚咽を繰り返すファナにグレイスは頭を撫で続けた。

「う……っあ」

「よく今まで頑張ったな」

「ああ……うああっ」

その言葉に完全にファナの作っていた壁が消えた。

フアナは今まで出したこともないような声で泣きグレイスに縋り付いた。

泣き疲れて眠るまだ女性というには幼い少女を抱いてグレイスは自分の私室へと歩いていった。

横を通りすぎる者は皆、一様に驚いてグレイスの腕に抱かれて眠るフアナを見つめる、だが何も言わないのはグレイスの表情の怖さからだろう。

だがそんな表情とは違い心の内はようやくもやもやしていた壁が取れたかのように晴れ晴れしてた。

しかし、晴れ晴れとしても彼女を早く休ませてやりたい、という気持ちは変わらず堅い表情のまま早歩きを続けるがグレイスの私室まではかなりの距離があった。

いつそ兵の数人を呼んでいまずぐ自分の私室の前まで送らせようかとも考えたが、今は誰にもフアナに触れて欲しくない。

早くと足を動かしていると突然、グレイスの耳に今一番聞きたくない相手の声が聞こえた。

「なにやら騒がしいな、」

供の者もつけず、相変わらず堅い表情を崩さないグレイスに声を掛

けれるのは一人しか居ない。

「キル……」

「なんだ、その難しい表情は」

明らかに嘲笑を含んだ笑いにグレイスは眉間のしわをさらに険しくなっていた。

「今、貴様を相手にする余裕がない。うせろ」

そう言い捨てるとグレイスは立ち止まった足を再び私室に向け動き始めた。

「情報を言つてやろうとしたただけなのにそれはないだろ……なあ？」

一・二歩進んだところでグレイスはピクリと身体を揺らす。なるべくフアナに負担をかけないようにゆっくりと振り向いてグレイスはキルのほうに向き直った。

「情報だと？」

早くフアナを寝かせてやりたいと思うのにキルの言葉でグレイスの足は完璧に止まった。

「ああ、リチュワードからの情報でな聞きたいか？」

答えを焦らすキルにいらつきながらもグレイスは平静を装ってキルに話しかける。

「お前に情報を操作する権限は誰も与えていない、言え」

キルが不快を露わに口元を引き結んだ。が、そんな表情を見せたのも一瞬でキルは得意そうに口元を歪めた。

「現皇帝、姫さんの父上が今、危篤状態だそうだ」

こんな大事な事柄を楽しそうに言うのもいかなものかというものだが、それを聞いたグレイスの顔も相当ひどかったらしくキルは上機嫌でどうする？とグレイスに問うた。

「それは、本当か？」

間違ふことのない情報だが念のため確認を入れるとキルは確かな情報だと珍しく真面目な顔で頷いた。

グレイスの額に汗が流れる、嘘だと願っていたがこの情報はどうやら

本当らしい。

「まず間違いないだろう、姫さんに伝えるか？」

「……それは俺が決めることだ、貴様に知らせる義務はない」

あくまで動揺がばれないようにはき捨てるように言っただれは
その場を離れた。

数歩歩き出すか歩き出さないかのうちにキルの笑い声が聞こえた。

想い溢れて（後書き）

久しぶりの更新です！
もう少し頑張らないと！

スパイラルへの序曲

あのとグレイスの部屋で目が覚めた。

当然そこにグレイスの姿はなかったが置手紙でそこにいるようにと指示が出ていた。

急いでいるような走り書きだが、最後の文面にはファナを気遣うような言葉が残されている。それをみたらなぜか笑ってしまった。

「俺の寝具はいくらでも使えばいいからまだ休んでいるように、それと用事があればルイを呼べ、あいつならどんなことに使っても構わん……か」

グレイスはルイのことを信用しているかがよく分かる。

そんな関係の人がいて羨ましく思いつつ、グレイスの気遣いに感謝した。

それにしても、やることがないというのはファナにとっては耐え難いものだ。

リチュワードに居た頃は目立たないように外出を控えていたが、今はそんな必要がないため突然外出を禁じられると退屈で仕方がない。(ランでも呼ぼうか、でも呼んでいいの?)

そんなことを考えつつ、一人悶々としていると廊下のほうから聞き覚えのある声があった。

「……いけ……ん。陛下から……禁じら……」

何を言っているのかはよく聞き取れなかったがその声の持ち主は分かった。

この部屋に招いてもいいものかと一瞬考えたが少し部屋の外で挨拶をするくらいならいいだろう。そう思ってフアナはそーっと扉を開いた。

「キル殿下、この前お会いして以来ですね。先日はろくに」ご挨拶もできなくて申し訳ありませんでした」

キルは扉が内側から開いたことに少々驚いた風に顔を上げたがすぐに笑みを作りフアナに挨拶の礼を返した。

「これは、姫様がいらっしやるとは。謝るのは私のほうだ、先日はすみませんでした」

始めてあったときとはまったく違う態度に驚いたがフアナも笑顔でそれを流した。

「今日は陛下のところでお休みですか？」

にこりと微笑まれ聞かれたフアナはその真意を読みとることも出来ず顔を赤らめた。

「そんなことではありませんわ、少し調子が悪いので大事を取れと陛下が私室を空けて下さっただけですわ」

「そうですか、でも仲睦まじいのは臣下として嬉しい限りです」

この前あった時とはだいぶ違いやけに下手に出てくるキルに首を傾げつつもにこやかにフアナはその問いを返した。

「陛下の寛大なお心のお陰で何不自由なく過ごしております、そんな方を嫌うなんてありえないことですよ」

「そうですか、それも喜ばしいことですね」

にこやかに言葉を返すキルに何ひとつ可笑しいところはない。
でも

なぜか腑に落ちない。

フアナはさつきから疑問に思っていたことを解決しようとして今までのやり取りを頭の中で再現してみる。

でもやはり可笑しいところはない。

黙っていても相手に失礼なのでファナもええと賛成の意思を示し頷いた。

「ところでキル殿下は何の用事でここにこられたのですか」

一旦、疑問は置いといて沈黙になりそうな雰囲気に戻そうと本来の質問に戻る。

するとキルはあぁと手を叩きその後失礼と詫びた。

「姫様は聞いておられますか？」

「何をですか、私は何も聞いてないのですが？」

いきなり真顔で意味の分からない質問をされ、ファナは若干戸惑った。

「はぁ、陛下からまだ何も聞かされておられないのですね」

分からないと言った風なファナの反応にキルは顔を顰めた。問い詰めてもいいものかと思ったがそれよりも早くキルが口を開いた。

「聞かされておられないなら陛下の意図するところがありがたいことと存じますので私が言うことは憚られます。ご容赦下さい」

申し訳無さそうに言ったキルをファナは不思議な目で見ると。

許すもなにも何も聞いていないのだ、自分が怒る理由がない。それにキルを罰する権利もない。

それに一応グレイスの皇帝の後だが、まだ立后式も迎えていない客人だ。キルがそこまで下手にでる真意が分からなかった。

そこまで考えてようやくやくなぜ自分がこんなにも腑に落ちなかったのが分かった。

この前会ったときは違う態度で感じた違和感はそれだった。

「……ご容赦もなにも、あなたは自ら臣下に下るような器でないでしょう？」

言ってしまった後、一瞬後悔したがそれよりも驚いたのはキルだったほうでポカンと口を開けている。

しかし数秒もしないうちにキルのほうからくくくっという笑い声が聞こえてきた。

「くくっ流石だな面白い姫だ。惜しいな」

さつきとは明らかに違う態度を見せられ驚いたが違和感がなくなったことで自然と笑みがこぼれた。

「そのほうがあなたらしいわ、陛下もさぞ愉快な方達をお側においておられますね」

「……そうでもない。がな、」

やけに不機嫌そうに呟く。それでファナはさつきの質問のことを思い出した。

「そうですね、さきほどの質問はなんだったのですか？」

「ああ、聞いていないなら俺からはいえない」

鎌をかけられたようでいい気持ちはしなかったが言っても答えてくれなさそうなのでそうですかと頷いて引き下がった。

「聞きたいならグレイスに聞いてくれ、答えてくれるかどうかは疑問だが……」

残念そうに言ったりわりに口調がうわずんだように聴こえて余計に聞きたくなかった。

でもそこまで意地を張ってまで聞こうとは思わないのでそうしますとだけ伝えた。

ひと通り会話を済ませ、ではとグレイスの私室に入ろうとしたとき遠くから声がかかった。

「そこで何をしているー！」

少し怒っているような口調で慌てて来たグレイスをファナは訝しげに見つめた。

明らかにグレイスが見ているのは自分のほうなのだがファナには怒られるようなことをした覚えはない。

釈然としない面持ちでもう一度グレイスを見るとグレイスはさらに眉間を寄せた。

「部屋にいるようにと置手紙を置いていったはずだが？」
こちらにきたグレイスは肩が上がっている。

そこまで急いで来ることかと思いつつファナは質問に答えた。

「読みました、でも……」

続く言葉が見当たらず口ごもる。それに気付いてグレイスは頭をポ
ンっただけ叩いた。

「分かった、声を荒げてすまなかったな、部屋に戻って休んでい
ればいい」

グレイスは声の口調を直しているつもりのようにだがまだ表情の硬さ
は戻っては居なかった。

戻っていればいいという曖昧な言葉を貰ったがようは戻れと暗に告
げられていた。ファナはちらとグレイスの表情を窺ってからグレイ
スの私室へ戻った。

「随分と過保護だな」

「なにがだ？」

ファナが部屋に入ったのを確認してからキルが口を開く。

グレイスもそれにあわせて答えを返したが明らかに顔が強張ってい
た。

「とぼけるなよ、なかなか興味深い姫だった」

満足そうに笑うキルに一種の危機感を募らせる。

「お前には関係のないことだ」

キルの笑顔は動揺していることを見透かされているようでグレイスの顔はさらに険しくなる。

「それよりも、ここに来てもいいという許可はだしてない。即刻ここから立ち去れ」

命令口調で声を荒げ廊下のほうへ指差す。キルは怪訝な顔でグレイスをにらんだが、何も言わず背を向けた。

グレイスもふつと肩の力を抜く。

すると、数歩先に歩いていったキルが思い出したように足を止めた。

「そうだ、大事な姫様に伝えて。聞きたいことは近くの人に聞けて、多分答えてくれないだろうけど」

最後の部分をやけに意味ありに言ってキルは足早に姿を消した。

スパイラルへの序曲（後書き）

今回はすこし短めなお話になっています。

歪み

部屋に戻ってきたグレイスの表情は見るからに不機嫌そのもので、フアナは何があったのか聞きたいことも忘れグレイスの顔を凝視した。

「どうした、何か用か？」

じっと見つめているとその視線に気付いてグレイスが問いかける。慌てて視線を逸らすと声が裏返ってしまった。

「べつ別になんでもありません」

「そうか……」

明らかになんでもないとはいいがたい状況だが、グレイスはそれ以上は聞かず自分の椅子に腰掛けた。

「陛下こそ、キル殿下と何かあったのですか」

（聞きたい、そう聞いてしまいたい）

でもそれは今のグレイスの表情では聞けるはずもなく。

フアナはなんだかいさずらくなって立ち上がった。

「何をしている？」

立ち上がった刹那、ぐいっと腕を引かれて体制がよろけた。

床に身体を打ちそうになったときに強い力で引き戻された。

「なにをっ」

一瞬だけ恐怖で目を瞑ったが引き戻されたときに正気に戻った。その瞬間、疑問よりも怒りが出てきた。

「いきなり何をなさるのですか」

キツとにらむと不機嫌なままのグレイスの声の上から降ってきた。

「それはこっちの台詞だ。もう一度聞くが、何をしている？」

別段、怒るところではないのは分かっている。最初もただ微妙な雰囲気醸し出しているグレイスといるのがいずらくて部屋を出ようとしただけだった。

でもいったん怒ってしまうと後に引けない。

そんなことと身長差がファナをグレイスが見下しているように見せている事実が、ファナは面白くない。グレイスの質問を無視して口を開いた。

「危ないではないですか？それなりの呼びとめかたというものがあ
るでしょう」

感情的にならないように努めて冷静を装う。

でも言葉の端々には棘があるのは致し方ないだろう。

そんなファナの気持ちなど気にしないといった風にグレイスは掴んだ腕を離す気配はない。

そんなことにも腹が立ってファナは思いっきりグレイスの手を振り
払った。

「私はもう大丈夫です、ですから部屋に戻ってもいいでしょうか」

そう言いながら、すでに扉の前に歩き始めたファナの前にグレイスが再び立ちはだかる。

「なんですか？私は理由を申し上げたはず、これ以上の長居は陛下
のためにもなりません」

「……」

グレイスが無言なのをいいことにファナは扉に手を掛ける。

だが本当に出て行っても良いものかと考え、足を止めた。

確かにファナが言ったことは本当のことなのだ。

後宮ならまだしも、グレイスの私室である部屋にいつまでも留まっ
ているのは世間的からみてもあまりよいことではない。

公私混同だと、まあ皇帝の仕事の中には子孫を絶やさないといいこ
とも大前提であるが女色が激しいと噂されかねない。

王宮での噂は些細なことでもどんな大事態に発展するか分からない、なるべくそういう危険因子は潰す、いや作らないに限る。

「失礼します」

考えて、一言だけ言って去ろうと扉を開けた瞬間、開いたはずの扉がもとの位置に戻り視界を閉ざされた。

開いたときに一瞬だけ見えたおそらく護衛の兵士だろっ人の表情が驚きに満ちた目だったのを思い出す。

でも、たしかその視線の先にはファナはいなかったはず。

そんなことを考えているとガチャリとなにかの鍵が掛けられた音がした。

「何をっ、」

視界が開けて見ると、扉の前に立ちはだかっているグレイスの姿があった。

「まだ動くなど言わなくては分からないのか？」

怒っているのはその口調から分かってはいるが、その表情からはなんの感情も見出せない。ただ何事にも動じない鉄のような冷たい顔だった。

「しかしっそれでは陛下が…」

それに反論するようにファナは口調をきつくするが、グレイスの氣迫に負けて語尾が弱くなる。

だか次の一言でファナの堪忍袋が切れた。

「俺は自分のことまで心配して欲しいなど言っていない」

「いつ……いい加減にして下さいっ！」

最後の語尾を下さいと敬語にしたのは上出来だ。

はあ？とでも言いたげなグレイスにファナは今まで溜まっていた不満をぶちまけた。

「なぜ、何も言ってくれないのですかっ？キル殿下からは聞いても陛下は何も教えて下さらない。何が起こっているんですか!？」

最後に少しは打ち解けたと思ったのにと付け足したのは、グレイスに自分が信頼していたということを示したかったからだ。

「キルだと？キルに何を聞いたっ！？」

ファナがキルという言葉を口にした瞬間グレイスの表情が強張った。それと同時に剣のある言葉がファナにふりかかる。

「えっあっ……」

あまりの迫力にファナは言葉をうまく繋ぐ事ができず怯んだ。

その様子をみてグレイスはしまったと手で顔を覆う。

「すまない、言い方が悪かった」

怒鳴られたことでビクリと肩を揺らしていたファナは唇を引き結んだ。

「驚かしてすまなかった、だがキルに何を聞いた？」

言葉は優しい口調に戻ったが、依然として顔が強張っていてファナとしては喋りにくい。

ふいっと視線を逸らして口を開いた。

「私も詳しくは聞かされませんでした、陛下に許しを請わないと喋れない用件らしく何もお話は聞いていないのです。ですが、私にも関係があるように見えたので……」

最後の言葉を濁すとグレイスは案の定、顔を顰めた。

「そんな話は……っ！！」

一瞬考え込んで、何か思い出したように顔を上げたグレイスはちつと舌打ちして顔をファナから背けた。

「何があつたんですか？」

顔を背けられるほどのことをしたつもりはないし、自分に関係があるのなら聞きたい。

だが、グレイスから返された言葉はファナの待っていた答えではなかった。

「悪いがそれはまだ言えない。だが、今はまだここにいて欲しい。すまない」

「……」

皇帝であるグレイスにすまないと言われ、苦そうな顔で言われて怒れるほど。ファナは強情ではない。

互いに無言のままいるとコンコンとノックされる音が聞こえた。これ幸いとばかりにグレイスが「入れ」と早口で言う。

すると、ドアからルイが入ってきてグレイスに一礼してファナに目を向けた。

「失礼します、陛下を少しお借りしますね」

「行くぞ」

「はい、参りましょう」

ファナには有無も言わず、グレイスは部屋を出て行く。

部屋を出る間際、グレイスがチラリとこちらを見た気がしたが結局何も言わず出て行ってしまった。

最後にルイが一礼するがそれにも答えられずファナは呆然と立ち尽くす。

何か釈然としない思いを抱えながら。

歪み（後書き）

誤字・脱字があればご報告くださるとありがたいです。

火蓋は切って落とされた

それから、何事もなく数日が過ぎていった。
少なくとも表面的には…

あれから陛下は部屋に戻ってこない、私が寝ている間に来ている気配はあるものの起きているうちは現れる気配はない。

(絶対、何かある……)

その確信はあるのに部屋から出られず自分で調べようとしても侍女がそれを阻む。段々とファナの苛立ちは溜まっていく一方だ。
苛々は日に日に度を増し、進んで近づくのはファナ付きのランだけである。

「暇ですねえ」

「そうね」

「何かお持ちしましょうか？」

「いいわ、かまわないからしばらく放っておいて」

「かしこまりました」

不機嫌なファナの扱いに慣れているランにはお手の物だ。ランは言い終えるが早く違う作業を開始した。

「あっ……姫様これっ！」

しばらく黙々と作業をしていたランの手が止まった。
ファナは煩わしそうにランを見上げる。

「どうしたの」

「何かの書類かと思ったんですが……」

そういつて差し出した紙にはファナも驚くものが書かれていた。

「何これ……今日じゃない、これって正式なお茶会のお誘いよね。
しかも私宛の」

「そうだと思いますが……」

紙を差し出したランも戸惑ったように返事を返す。

「でもなぜこれが陛下の下にあるのかしら……ねえ？」

戸惑いを隠せないランとは別にファナの目は怒りで燃えている。

顔は怒りの余りふるふると震えている。

ランとしてもこれほどまでに怒っているファナをみるのは久しぶり
だ。

「ラン、まだ間に合うわよね？」

反論など許さないと存外に告げてファナは紙をきつく握った。

(紙でなくてよかった)

ランがそう思うほどに……

「はっはい、多分まだ間に合うかと……」

「出ます、案内役を一人頼みなさい」

ランがいい終える前にファナは立ち上がりて扉の前に立った。

「姫様、陛下の許可がいるのでは？これには陛下もご出席されるよ

うですし」

陛下に一泡ふかせてやりたい気持ちも分らないではないが、ここは侍女として一応とめに入る。

これでファナが歩みを止めることがないことくらい分かつてはいるが一縷の望みを持ってランはファナに問いかけた。

「これは私宛に来た招待状よ、それになぜ陛下の許可がいるの？」

正論だ……

だがこの状況でいうと屁理屈に聞こえてしまうのは否めないだろう。ファナは勢いよく扉を開けた。

案の定、部屋の前で見張りをしていた兵士達はファナの突然の暴挙ともいえる行動に戸惑いながらもファナに部屋に戻るよう呼びかける。

ファナはそんなことなどお構いなしに歩を速めた。

「お戻り下さい、陛下の許可がない限りお出にならないようお願い申し上げます」

「ラン、行くわよ。着いて来なさい」

「……っあ、はい」

ファナに行っても無駄だと悟ったのか兵士や侍女達はランに助けを目で求める。

でもランはファナの侍女であってこの城のこの国の侍女ではない。可哀相だとは思ったが目を瞑った。

「お戻り下さい、陛下がご心配なさます」

「……」

「お戻り下さいっ!」

「お黙りなさい、そんなに心配ならついてくればよろしいでしょう。陛下には私からお伝えしておきますから」

幾度の呼びかけに痺れを切らしたファナは少し刺々しく一喝した。兵士は苦い顔をしながらも黙ってついて行くことを決めたようだ。ファナの後ろにすつと下がる。

ファナはその様子に満足してとめていた歩を再び動かし始めた。

「ラン、今日ご出席の方々のお名前ってそこに書いてあったかしら？」

歩きながら話を進めるファナはもう外向けの顔に戻っている。ならばランもそれに応えなければいけない。

「はい、今日ご出席の方々は皆様、皇族に血縁関係のある方達ばかりです。陛下の叔父にあたる親王様を始め、新王妃様、四卿であるローデル公、ハイワン公、十二卿のデルサン卿、それとそのご正妻並びにご息女の方々などが主だと思えます」

「分かりました。ありがとうございます」

「いいえ、お役に立ててなによりです」

出席者リストを言っている間に会場に着いた。

幸運なことにまだ出席者はきておらず、ファナはたぶん自分が座るであろう席に腰掛けた。

「ねえラン、今更なのだけれどこのお茶会は誰が開いたのかしら？」

「陛下……ではないでしょう。あれほど姫様を外にお出しにならないのですから」

「そうね、それはまず考えられないわ。でも城を場に指定できるのは皇族しかいないはずよ」

突然、沸いたようにふつとした疑問に二人とも考え込む。実はランは前々から疑問に思っていたことなのだが、
ファナは怒りのあまりに忘れていたようだったので伏せておいたのだ。

「おやつ誰かと思えば姫ではないですか」

考え込んでいたので扉の音に気付かず、いきなり声をかけられたファナはびくつと肩を揺らした。

「キル殿下！」

「主催者よりも早く来られてしまったては顔が立ちませんよ」

そこでニコツとファナに向かって笑みを作る。ファナもそれにつられて微笑みを返した。

「キル殿下がこのお茶会を……。というか私の前ではそんな言葉遣い不要ですよ、いつもどおりにしてください」

先ほどから聞いているキルの他人行儀な声はどうも本人と合っていないらしくくりこない。

流石にお茶会であるの口調ではまずいが今ならいいのでは？と伝えると今日は身内の関係ではなく、主催者と招待客だからとやんわりとその提案を断られてしまった。

「では、そろそろお茶会を始めましょうか」

他愛のない会話はキルの言葉で途切れる。
えっ？と首を傾げたとき後ろの方でキィと扉の開く音が聞こえた。

火蓋は切って落とされた（後書き）

更新が遅れました。すみません（泣
誤字脱字があれば報告くださると嬉しいです。

茶会の始まり（前書き）

更新が遅くなり申し訳ありませんでした。

茶会の始まり

なぜここにいる？

そう言いたげな目をしてグレイスはファナを見た。

ファナは気まずそうに目を伏せる。

自分の下に来た招待状なのだと言いきるめて出てきたものの、いざその命令を出したグレイスに会うと後ろめたさで顔さえ合わせずらい。

「どうし……」

「私がファナ様をお茶会に誘ったのです、陛下。ファナ様に罪はありません」

グレイスが口を開きかけた途端、今まで黙って事を見ていたキルが前に立った。

驚いたのは自分だけではなく、グレイスも言葉を見失っているように見える。

ただなんにしるキルが助け舟を出してくれたのには変わりない。後で礼を言わなくてはいけない。

「事情は察しかねますが、今日だけはお許しただけないでしょうか」

グレイスはその言葉に眉間に皺を寄せた。

グレイスは何が不満なのかファナには分からない。だが、黙りこくってしまったグレイスを見てファナは耐え切れずに口を開いた。

「私は帰ったほうがよろしいですか？」

自分が発した言葉にも関わらず卑怯な言葉だと思った。

これを言われて帰れなどと言えるようなグレイスではない。

しかも自分から出て行ったのだ。なのに今度は帰るなど自己中も甚

だしい。

「いや、構わない。楽しんでくれ」

「ありがとうございます、陛下」

礼を言いつつ、自分のことを呪った。

頭を下げていたから彼の表情がどんなものだったのかは知らない。
でも……

「そうとうショックだっただろうね」

突然降って来た言葉に驚いて顔をあげる。

キルはこちらに目を合わせないまま口角の上げた。
嫌な目だ。

吐き気がこみ上げる。そうさせたのは自分であるはずなのに、まるでそうさせられたのではないかと疑ってしまう。

「貴方には関係のないことだわ」

強い言葉で会話の深入りを拒絶するとキルはそれ以上は問わなかった。

だから気付かなかったのかもしれない。

お茶会の間キルが鋭い視線で自分を睨んでいたことを。

自然と手に力が籠もる。
手には尋常でないほどの汗が伝っている。

「……ルイ」

「うん」

後ろに立っているルイを呼ぶとルイもグレイスの言いたいことが分かっていると言うように相槌を打ってきた。

ルイのことだ。

相当優秀な奴を彼女に付けていることだろう。

彼女に気付かれないような優秀な影を。

だが、このいいいような不安はなんだ？

何か嫌な予感がする。

ちゃんと説明して置けばよかったのかもしれない。

そうしたらフアナもお茶会などに出ることなどしなかっただろう。

「くそっ」

ダンツと叩き付けた机はカタカタと揺れた。

部屋に戻ったらすべてを話す事を心に決めてグレイスはひたすらフアナの無事を願った。

茶会の始まり（後書き）

今後も亀並みの更新ですがよろしくお願ひします。

着々と……

どうしてあの時、グレイスに付いていかなかった？
どうして？

後悔ばかりが残る。

それもすべて……………

「キル殿下、どういうことですか!？」

お茶会の途中、誰もいない廊下を選んでキルを呼び出すとキルはここにこととして付いて来た。

これからファナが何を言うかも知らず。

「君こそこんな暗い廊下に呼び出して、なんの用かな？」

これみよがしに大きな声を出して愉快そうに話すキルにファナの怒りの沸点は限界が来ていた。

「何の用ではありません!! 貴方は私をなんと紹介しましたか!？」

「ああ、そのことね」

怒りで我を忘れかけているファナと違い、キルは余裕そうに頷く。
またそれがファナの癢に障っていることにキルは気付いているのだろうか？

「僕の大事な人と紹介しただけだ」

「しただけ? 勘違いされることを分かっているらっしゃらなかったのですか？」

ぎりぎりで自分を保ちつつ、肩で息をしているファナにキルはこりと笑ってそれを制した。

「勘違い? 僕は間違いは言っていないよ。僕の大事な人の大事な婚約者だ」

「それをなぜ省略されたのです」

ファナは怒りを通り越して諦めた表情を見せる。

確かに、間違いではないのだ。

グレイスはキルと従兄弟同士。そして自分はそのグレイスの婚約者だ。

だが、キルの言い方ではファナはキルの婚約者だと勘違いされてもおかしくはない。

いや実際に勘違いされたしまった。

そのせいで本来主役であるはずのグレイスの婚約者が現れないと大騒ぎになっていたのだ。

今更自分です、などと言えるはずもなく（しかもキルが隣にずっといたせいで抜け出すことが出来なかった）黙って自分の評価（グレイスの婚約者としての）が下がるのを見ていなければならなかった。「ああ、そのことなら勝手に誤解した貴族達が悪いんだ」

だから僕は間違っていないよとまったく反省の色を示さないキルにファナはため息をついた。

「では、私の評価が下がってしまったことキル殿下には関係がないと？」

「評価？評価もなにも貴族達は何も出来ないよ」

「何も出来ない？キル殿下は民衆のいえ、集合体の恐ろしさをご存知ないのですか？」

「知ってるよ……恐ろしいくらいにね」

一瞬、キルの周りの空気が変わった……気がした。

気がしたのはほんの一瞬でキルはその後、ころつと態度を変えて人懐っこい笑顔を見せてくる。

「だからさ、もし君に何か起きたら助けるから安心して」

「お願いいたします」

そついうことなら任せるとファナは頷く。

それを見てキルは一層笑みを深めた。

着々と……（後書き）

大変更新が遅くなり申し訳ありませんでした。

しかも内容がとても短いですが読んでいただけたら嬉しいです。

誤字・脱字などの報告を下されると嬉しいです。

感想をいただけたらとても嬉しいです。

歩み寄るために

お茶会はその後、何事もなく進んでお開きとなった。

結局その後もファナはキルの《大事な人》として紹介され続けたが

……。

そして、今朝である。

ファナがいくら願っても時間は待つてはくれない。

婚儀が済むまではお互いに時間がないからせめて朝だけでもという合意のもと一緒に朝食を摂るということになっている。

もちろんその相手とはグレイスのことだ。

昨日の今日で気まずいことこの上ない。

「姫様、どうされます。朝食は別にお願いたしますか？」

昨日のいきさつを知っているランはファナに助け舟を出してくれた。しかしそれではダメだと自分に言い聞かせてファナは首を振る。

「いいえ、もう準備されているはずだわ。ありがとう」

でも……、とランは何か言いかけて口を嚙んだ。

おそらく自分のことを案じてくれたのだろう。

ランの視線からそのことが直に伝わってくる。

だからこそだ、だからこそこれではいけない、自分のやったことだ、自分で決着をつけなければいけない。

「行きます」

ランは一瞬、口を真一文字に引き結んだあと、「かしこまりました」と頭を下げた。

グレイスの朝は早い。

皇帝というだけがかかってくる仕事は皇太子の頃の10倍はある。自分でも仕事は速いと思っただけはいるのだが、それでも次々と仕事は立て込んでくる。

昨日遣り残した書類を片付けながらグレイスは深いため息をついた。

「どうしたんです？陛下。仕事が片付かないようであれば朝の朝食はお断りしますか」

「いや、いい」

簡潔に答えるとルイはそうですかと次の資料に手を伸ばした。できれば本当は断りたい。だが、それは自分勝手な理由だ。

ファナは昨日のことなど気にしていないかもしれないかもしれない。

気にしていないといったらそれはそれで問題だが、ファナには笑って欲しない。

自分がファナとの関係にヒビを作った張本人だというのにそれでもファナに自分のことを見てほしいと思ってしまう。

浅ましいことだと思う。

それでも自分から謝ることができないこの立場が恨めしい。いや、立場を理由に逃げているだけなのだ。

謝ろうと思えば謝れるはずだ。

それでもまだ、ファナが動いてくれることを期待している。

「陛下には一度じっくり話をされるのが良いと思いますか？」

「……………」

ルイは苦笑いを溢す。

おそらくルイは自分とファナの間になにかあったことは悟っているのだろう。

聞かないだけで。

「……………抜ける、続きは朝食後にする」

「かしこまりました」

自分の気持ちに区切りをつけるために、ファナと向き合ったためにグレイスは執務室を後にした。

歩み寄るために（後書き）

またまた短い投稿です。

次回は少し長くなる予定です。

相変わらず不定期更新ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

もどかしい思い

「おはようございます」

「ああ」

簡潔な一言で朝食は始まった。
二人の間に会話は無い。

最初は口を利きたくないという理由であえて顔を合わせなかったが、今は違う。

明らかに避けているのだ。お互いがお互いを。
話をするために来たのにお互い話を切り出せないで居た。

カララッ

「あっ」

動揺でファナの手からナイフが滑り落ちる。

小さく声を上げたファナは失敗したとでもいうように目を瞑った。

「式でもそんな失敗をするわけじゃないだろうな」

グレイスの冷たい声が響き渡る。

ファナは驚いてグレイスを見るが次には無表情に戻っていた。

「しません」

「ならいいんだがな」

挑発的に睨みつけるとグレイスは馬鹿にしたように鼻で笑った。ため息をつくのを我慢して新しく準備されたナイフを手に持つ。

「いたっ」

落とした時に刃を擦ったのだろう、ファナの指から薄く血がにじみ出ている。

手当てをしようとしてランを呼ぶ。

「ラン、怪我してしまったの手当て、お願いできるかしら」

指をランに見せる。

その瞬間、ガタツという音が辺りに響いた。

音がしたのは向こう側、グレイスのいるほうだ。

まさかとは思いつつ振り返ると向こうも驚いたようにファナの指を凝視していた。

「その指、……」

「今、準備します！」

ランとグレイスの声が重なる。

それにハツとしてランの方を振り返るとランは罰が悪そうに頭を下げている。

「陛下、何かおっしゃいましたか？」

立っているままのグレイスに声をかける。

グレイスの目はファナの指を見たままだ。我に返ったようにグレイスは咳払いをする。

「いや、なんでもない。手当てをしにいけ」

手で軽く促すとグレイスはそのまま席を離れる。

「何処に行かれるのです？」

「まだ仕事があるからな、戻る」

部屋を出て行くグレイスに声をかける。

振り返った顔にはもう、さっきの焦りの表情はなかった。

「了解、いたしました」

その言葉に表情に落胆を覚える。

何故？

分からない。

このもやもやした気持ちの正体はナニ？

心配、して欲しいなんて……

「馬鹿ね」

グレイスが去った部屋でファナは一人呟いた。

もどかしい思い(後書き)

更新が遅くなりました。
今度は頑張ろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3845i/>

花咲く頃に

2011年8月23日21時14分発行